

---

# の女神と の娘

真咲 楓

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

の女神と の娘

### 【Nコード】

N7303X

### 【作者名】

真咲 楓

### 【あらすじ】

ありがちな異世界トリップ……はいいんですが、なんでマツパの男達の真っ直中!?

あらゆる乙女の味方(その代わり全ての男は抹殺対象)であるアテナに保護されて平和な毎日を送っていたユカリ。けれどある日、全くの濡れ衣でヘラの怒りを買ってしまった!…え?ここどこですか?天界じゃないって、どういう冗談?しかも声、出ないんですけど!!どこからどう見ても美女にしか見えない英雄アキレウスに保護され、男嫌いの女の子がアテナの元に帰ろうと奮闘するお話。アポロンが

変態なのは仕様です。

## 1 男なんて滅びればいいのに

世の中、大抵のことは突然起こる。

赤ん坊が生まれてくる時も、女の子の生理が始まる時も、男の子の精通が始まる時も、たまに人を好きになることも。

病気になることも、お気に入りの洋服を見つけることも、そう、大抵のことは「突然」で済まされる。

しかし、いくらなんでもあれはないだろうと、ユカリは後から思い返すだにため息をつくのだった。

\*\*\*\*\*

つるり、がさがさがさ、ざばん！

その時の状況を音で説明するならこうだろうか。  
とりあえず、ありえないとだけ先に明言しておく。

彼女が落ちた小さな崖の下には、池はおろか水たまりなどないはずなのだから。しかも温かい　お湯だなんて！

何だかいい香りのするお湯の中でざばざばともがいていると、力

強い腕で引き上げられた。

「珍しいこともあるものだ。人間ではないか」

「ほう、どれ」

「なるほど。確かに人間の乙女だ」

咳きこむ合間に、そんな会話が頭の上でされている。それにつられて、ユカリはそろりと顔を上げた。

そう、上げてしまったのだ。

それがすべての始まりとも知らずに。

「……………っ、きゃあああああああああ！！！」

そこにあつたのは、男の裸、裸、裸、裸、見渡す限りの男の裸体。視界に強烈な肌色の嵐に、彼女は反射的に悲鳴を上げていた。

動きにくいお湯の中を必死に逃げ回っても、腕は次から次へと伸びてくる。

顔を上に上げればにやけた男の表情。下を向けば人生で初めて見る性器の群れ。

伸びてくる腕は時折その性器を握らせたりもして、未知の感覚に全身鳥肌が立った。

ユカリはといえば、花の高校生、青春真っ盛り。上から下までびしょ濡れで、身体の線がはっきりと目立ってしまっている。

それがまた恥ずかしくて、必死でもがき続けた。



## 2 目覚め

薄手のカーテンから差しこむ柔らかな光が、一人の少女を包んでいる。大きく豪華なベッドに横たわる彼女は、真っ白なシーツに埋もれて、静かに瞼を閉じていた。

艶のあるまつすぐな黒髪が白いシーツに広がり、抽象画のようなコントラストを描いている。閉じられた瞼を縁取る睫は長く、精巧なビスクドールを思い出させた。

白い肌。薄く色づいた唇。

今にも動き出しそうなそれは、しかし固く閉ざされたままだ。

床も天上も調度品も、全てが大理石でできた真っ白な部屋の中で、彼女だけが漆黒を纏っていた。

やがてその部屋に、ニンフ達が滑るように入ってくる。

カーテンを開け、水差しや着替えを手にした彼女達は、一様にこやかな表情で少女を囲んだ。

「おはようございます、ユカリ様」

朝でございませよ。

最も少女に近いニンフが、そっと彼女の肩に触れる。人形のように身じろぎ一つしなかった彼女の瞼が、小さく震えた。

ゆっくりと開かれた瞼からのぞいた瞳の色は、やはり黒。

大きな瞳が完全にあらわになると、彼女はゆっくりと微笑んだ。

「おはようございます、皆さん」

意志の強そうな、涼やかな声。けれど喜色を含ませたそれは、とても柔らかく響いた。

そしてまた、一日が始まる。

\*\*\*\*\*

ユカリは人間だ。しかも、日本人。

そんな彼女が何故、仮にも神の端くれであるニンフにかしずかれているのかは、ユカリ本人にもわからない。

けれど、一様に好意的に接してくれる彼女達に、ユカリはそれ以上の好意を示していた。

美しいものを見つければ、彼女達に見せに行き。おいしいと感じた果物を、みんなで分けて食べ。

身の回りの世話をする者とされる者、その垣根を越えて交流していた。

薔薇の花びらを散らせた洗面器で顔を洗い、ふわふわのタオルで



丁寧に拭われる。その後の肌の手入れも、ニンフ達が競うようにして念入りに行う。

それを黙って人形のように受けているユカリは、しかし柔らかに微笑んでいた。

これもまた、毎朝の光景。

たつぷりとドレープを作ったキトンは、一体何でできているのだろうか。シルクよりも格段に肌触りが良く、しかし羽のように軽かった。

化粧台に腰掛けたユカリの髪を、ニンフの細い手が器用に結び上げ、そこに生花がいくつも飾られる。

「相変わらず、美しい漆黒の御髪。指触りも最高ですわ」

「白い花がよく栄えますわね」

「せつかくの桃色の唇を、紅で隠してしまうのは惜しいこと。軽く蜜を塗るだけにしておきましょう」

「せつかくの大きな瞳ですもの、もっと華やかにしてさしあげなければ」

「お粉も少しで結構ですわね、これだけきめの細かいお肌ですもの」

口々にユカリを褒めながら、ニンフ達は好きなように彼女を飾りあげていく。けれどそのセンスに間違いはなく、黒髪に生けられた花々は、真珠のように彼女を彩っていた。

西洋人と比較すると幼く見える容貌も相成って、ユカリは海から打ち上げられた人魚姫になったような錯覚を覚える。

「ユカリ様、今日もお似合いですよ」

「ありがとうございます」

笑顔で礼を言ったユカリに一礼し、ニンフ達が静かに部屋を出て行った。姿鏡で自分の格好をチェックして、ユカリは彼女達の仕事の完璧さにため息をつきたくなる。

薄く施された化粧。睫の一本一本まで、くるんと上を向いている。もちろん、唇も蜜で濡れて輝いている。それらは男を誘うような色気ではなく、どこまでも無垢な少女の印象を強く押し出していた。一部の乱れもない、美しいドレープ。多ければ多いほど位の高さを表すといってもいいそれは、女神達に負けないほどたつぷりと惜しげなく生地を使って作られている。くるりと一回転してみると、裾がふわりと舞ってその美しさがさらによくわかった。

綺麗に結び上げられた髪。生花は絶妙な配置で、うるさすぎず寂しすぎず、彼女自身が見てもうっとりしてしまうほどだった。

運ばれてきた朝食をゆっくりと食べながら、窓の外を眺める。

9

天候の荒れなどありえないこの天界は、今日も綺麗な青空が広がっている。

地面には一面に花々が咲き乱れて、やっぱりここは神の住む世界なのだと実感する。

あちらこちらに建っている白亜の宮殿と、色とりどりの花々。そして、青い空のコントラストがとても美しかった。

この景色にも、すっかり慣れてしまったと、ユカリはぼんやりと考える。ここに落ちてきた当初は、あれほど毎日泣いてばかりだったというのに。

恋しかった。

家族との何気ない会話、携帯でのメールのやりとり、友人とのウ

インドウシヨツピング。

元の世界の全てが恋しかった。帰りたくて帰りたくてたまらなかった。

どうして私が。なんでここに。望んできたわけじゃないのに！

食事を出されても、食欲がわかなかった。

違う世界だとまざまざと見せつけられる、外の景色が怖かった。

豪華なベッドが、かえって自分の部屋ではないのだと思い知らされるようで嫌だった。

分厚いカーテンを閉め切って、夜も昼もなく泣き続けたユカリに、彼の神はずっとついていてくれた。自身の仕事もあつただろうに、ずっと彼女を抱き寄せて頭をなで続けていた。

『泣かないで、愛しい子。きっといつか、あなたの世界に帰る日が来ます』

『大丈夫、必ず私が方法を見つけてみせますから』

『ユカリ。ほら、果物の汁を搾ってもらったの。泣いてばかりでは、そのうち身体を壊してしまっわ。帰る日のために、力をつけなければ』

その時のユカリには時間の感覚などなかったから、それが何日間だったのかはわからない。けれど、少なくとも彼女にとっては、長い長い時間だった。

それこそ、永遠に思えるほどに。

いつになったらこの悪夢が終わるのか、それしか考えていなかった。

そんな長い間、彼の神は文字通りつきつきりでいてくれたのだ。ひたすら彼女の体調を心配し、なぐさめ、時には手ずから食事を与えてくれた。

帰る手段がないとわかった時は、泣きわめくユカリを抱きしめて、自らもほろほろと涙をこぼした。

涙も枯れ果てて、人形のようになったユカリに、彼の神は言った。

『心配しないで、ユカリ。私の力の及ぶ限り、全力であなたを守るから』

そうして開かれたカーテン。

その向こうに広がっていた突き抜けるような空の青さと、彼の神の光のような笑顔を、彼女は一生忘れない。

たとえ二度と戻れなくとも、このお方に一生を捧げようと、そう思った。

### 3 女神達の優雅な日々

ニンフから受け取ったティーセットを、こぼさないように気をつけながら小走りで駆ける。

大理石の床は、不思議と裸足でも冷たくなくて、むしろ靴を履いていた方が滑って転びそうだ。

かちやかちやと食器が音を立てる。

はしたないとは分かっているけど、一秒でも早く敬愛する彼の神に会いたかった。

「アテナ様！ お菓子をお持ちしました！」

「ユカリ、そんなに慌てることはないのよ」

ゆつたりと微笑むのは、麗しい女神。

彼女をあのだ獄から救った、そして暗闇から解き放った、ユカリにとって最も優先すべき対象。

金色の長い髪をゆるりと流し、華奢な椅子にゆつたりと座った姿は、まるで一枚の絵のよう。そんなアテナの滑らかな手で頬をなでられて、ユカリは無意識にうっとり目を閉じてしまう。

蜂蜜色の瞳がそんな彼女の姿を映していたが、その半分は長い睫毛で隠れてしまっていた。

そんなアテナと一緒にいるのは、やはり麗しいアフロディーテ。豊かな蜂蜜色の髪を豪華に結い上げて、生花で飾っている。

ユカリもけして容姿が劣っているわけではないのだが、彼女の隣

に立つのもおこがましいと感じてしまうほどの華やかさだ。アテナの宮殿のはずなのに、自分が主であるかのように、すっかりくつろいでいる。

アーモンド色の瞳は大きくて、長い睫はくるりと上にカールしている。

白魚のような手も小さくてすっと通った鼻筋も、男ならば絶対に守りたくなるような可憐さ。

けれど、全身から放たれるのは、アテナには絶対にならない「色気」だ。

たとえ世界中の美女を集めたとしても、その中に隠れたアフロディーテは、絶対に一瞬で見つかってしまっただろう。

そんなアフロディーテに手招きされて近寄ると、ユカリの身体はさっと攫われ、豊かな胸にぎゅうぎゅうと抱きしめられた。

別に貧相な体形というわけではないが（むしろ日本では標準以上だったと自負している）、アフロディーテの前では子供も同然だ。

「ああ、この小ささ！ すっぱり収まる大きさ！ やっぱりユカリは可愛いわねえ」

「アフロディーテ！ 何をしているのですか！」

「何よ、減るものじゃないんだし。可愛いものを愛でるのは、神として当然のことでしょう？」

「確かにユカリは可愛いです！ けれど、それとこれとは話が別です！！」

アテナの頬が、興奮で赤く染まってしまっている。そんなアテナも美しいと思うのだが、早くアフロディーテがからかっているだけ

だと気づいてほしい。

明らかにおもしろがっている口調で、アテナに聞こえないようにくすくす笑っているのだから。

ユカリへの親愛の情は本物だが、ダシにされている感が否めない。

「ア、アフロディーテ様、もうそのくらいで……。アテナ様がお気の毒です」

「ユカリはいつも一生懸命ねえ」

「だって……。アテナ様は、私の命の恩人ですもの」

桜色の唇でくすりと笑うアフロディーテに、頬が熱くなるのを感じた。

あの時のアテナの凜々しきさといったら、何度思い出しても素敵なのだから。

面白がるように群がる太い腕の中を逃げまどっているユカリの悲鳴を聞きつけ、アテナが二ヶを飛ばしてきたのだ。

『乙女に何という仕打ちをしているのです！ その汚い手を放しなさい！』

二ヶが突き刺さった半径五百メートルの神々が吹っ飛んだ。

文字通り吹っ飛んだ。

そして、涙目で息も絶え絶えになっているユカリに、優しく微笑みかけたのだ。

もう大丈夫だと。

ちなみに、アテナの横にちょこんと控えている、亜麻色の髪の幼い少女。背中から真っ白な羽が生えていて、肌はすべすべふにふに文字通り天使のように可愛いこの子供が、実は武器になるなど、一体誰が想像できるだろう。

彼女はニケ。

アテナの腹心のような存在で、勝利の女神と呼ばれているらしい。

ユカリは（興味のない科目については）あまり真面目な生徒とは言えなかったが、美術の教科書が何かで、「勝利の女神ニケ像」とかいふ彫刻を見た気がしないでもない。頭と両腕がなくて、船首につけられていたものだとか聞いた覚えがある。

いざという時はぴよんと飛び上がって、器用に空中で一回転するするとたちまち一本の槍（この時の姿がニケ。アテナ愛用の武器）に姿を変えるのだから、初めて見せてもらった時にはそりゃあ驚いた。

こんな可愛い子が、まさか半径五百メートルの神方を吹っ飛ばすほどの力を持つているなんて！

ニケはしゃべらない。少なくとも、ユカリはしゃべっているとこるを見たことがない。

けれど、いつもにこにこしているから、少なくとも好意を抱いてくれているのだと思っている。

戦争に出ると、毎回のようアテナもニケも怪我をして帰ってくる。

その度にユカリが泣きながら手当てをするのだけれど、そんな時



でもアテナは彼女に優しいのだ。

『ユカリが手当てをしてくれると、なんだか治りが早い気がします』  
『そんなことはないです！　お願いですから、怪我なんてしないで帰ってきてください！』

ぐしぐしと泣く情けない頭を、ニケがそつとなでて慰めるのもいつものことだ。アテナが彼女の心の支えなら、ニケは心の癒しだった。

それについて話すと、アフロディーテはいつも爆笑するのだが。

「アフロディーテ様も、こちらの果物はいかがですか？　ニンフの皆さんに人気なんです」

「ええ、いただいわ。ニンフはこういうものには敏感よねえ」

艶やかに笑ったアフロディーテが、綺麗に切り分けられた果物を一房、優雅につまむ。満足そうにうなづくアフロディーテも、同性のユカリがうつとりしてしまうほど美しい。

「ユカリ、こちらにいらっしやい」

「はい」

涼やかなアテナの声に導かれて近寄ると、ネクタルが注がれた杯を差し出された。

ネクターは神の飲み物。人間のユカリが口にするには、畏れ多くてためらうものだ。

ユカリが慌ててかぶりを振っても、アテナもアフロディーテも笑っばかり。

「ここで生活しているんだから、食すのもおかしくないでしょ？」

「でも……私、人間です！ こんなものをいただくわけには…

…！…！

「いいですよ、ユカリ。誰が反論しようとも、私が許します」

アテナの優しい言葉に促され、震える唇でネクターを一口含む。

言葉に表せない程の芳潤さと芳香が口一杯に広がって、ユカリの頬が無意識にだらしなくゆるんだ。

「おいしい……」

「でしょう？ ユカリにも一度、是非楽しんでもらいたかったのよ」

うふふと柔らかく笑うアテナからは、戦争の時の勇ましい姿は想像できない。

けれど、「戦に赴きます」と仰る時の凜とした美しい佇まい！

毎回毎回うっとりしてしまうユカリだが、絶対に誰でもそうなると思っている。

「ユカリ、あなたも私達の世話ばかりで疲れたでしょう。少し休んでいらっしゃい」

「そんな！ 私、アテナ様のために働くの、幸せです！」  
「嬉しい言葉をありがとう。でもね、ユカリ。あなたは人間なので  
すよ。少しは休息をとらなければ」

そう言っつて微笑むアテナの、なんて美しいこと！

ああもう、私ここに来てよかった！ 美人さん万歳！！

こっそり悶えるユカリの横で、アフロディーテがのんびりととん  
でもないことを言い出した。

「あら、でも。私、ユカリは神にしてもいいんじゃないかと思っ  
てるわよ？ 人間にしては親しみやすいし、可愛いし、ニンフ達も仕  
える相手として認識してるみたいだし」

ニケも一生懸命にくくくとうなずいていて、ユカリは一瞬、状  
況も忘れてその愛らしさに頬をだらしなくゆるませてしまった。  
慌てて顔を引きしめて否定しようとしたところで、よりもよっ  
てアテナまで同意してしまう。

「確かに……ニンフがあのように、人間に対して献身的に仕えるの  
は珍しいですね。もしかしたら、神になるべくしてここに来たのか  
しら？ ユカリは」

うふふと笑ったアテナは、しかし次の瞬間表情を一変させた。

「ああ、でも、人間を神にするにはあの忌々しい父上の許可を得なければ……！ ユカリをこれ以上危険な目に遭わせるわけにはいきません！」

どこがどう危険なのか、ユカリにはよくわからなかった。だが、父上というからにはゼウス。そしてイコール、男の神。なるべく会いたくはない。

想像しただけで涙目になりながらアテナにすがりつくと、大丈夫というように優しく髪の毛を梳かれる。

それはまだ、彼女が平和に暮らしていた頃のいい思い出。

## 4 予兆

「ユカリ、ちょっと」

ある日、いつになく神妙な面持ちで、アテナがユカリを手招いた。小首を傾げながら傍に寄ったユカリに、アテナは美しい蜂蜜色を顰ませる。

「ヘラがあなたを呼んでいるの。良くない予感がするわ、私が断つてもいいけれど……」

聞けば、ものすごい剣幕らしい。あんなところに可愛いユカリを行かせられないと、アテナは眉根を寄せたまま続けた。

「理由を尋ねても、身に覚えがあるはずだの一点張り。念のために訊くわ。ユカリ、心当たりは？」

「あ、ありません！！ 第一私、ヘラ様にお会いしたこともありません！」

そもそも、アテナにべつたりのユカリが、他の神と出会うこと自体が珍しいのだ。

神（しかも女神限定）自身がアテナの宮殿に訪れなければ、ユカリと顔を会わせることもない。

アテナもそれを知っているからこそ、「念のため」と前置きをし

たのдарろう。

不安に瞳を揺らすユカリの頬をなで、アテナは心底悔しそうに唇を嚙んだ。

「非常に不本意で勝手極まりない申し出ですが、断るわけにはいきません。ヘラはあれでも父ゼウスの妻。あんなどぐされ野郎が私の生みの親だということ自体認めたくないのですが、万能の神、そして神々の長であるゼウス。その妻であるヘラには、誰も逆らうことができないのよ」

あの若作り、やら年増、やら、不穏な言葉をアテナが呟いている気がしたが、いつも優しいアテナがそんな暴言を吐くはずがない。まして、自分の父親をどぐされ野郎などと呼ぶはずがない。

ユカリは全てを気のせいだと自分に言い聞かせ、大丈夫だと両の拳を握ってみせた。

「だ、大丈夫です！ アテナ様のお母様なら、きっと何か理由があるはずですよ！」

もっとも、その拳はぶるぶると頼りなく震えていたが。

アテナの父親の妻なら、当然母親になる。

そんな単純思考で言い切ったユカリに、アテナは何ともいえない表情になった。

「……へらは私の母ではないのよ」

「え!？」

「私は自力で、父の額をかち割って出てきたの。あの男が！ 私の母上を！ 自分の正妻を！！ 丸ごと呑みこんだせいでね」

アテナの笑顔が怖い。ユカリは初めてそう思った。

美しいかんばせに、何やらどす黒いものがあふれかえっている。

それでもまあ、なんとかなるだろう。

話を通じない相手でもなし、きちんと誠意を持って臨めば問題はないはずだ。

\*\*\*\*\*

などと思っていたユカリは甘かった。

たどえて言うなら、小さい子供が綿飴の袋を親にねだって、結局食べるのに辟易するくらい甘かった。

「そなた……人間の分際で、よくもわたくしの夫につきまとえるな」

「え？ はあ？ あの、それ、何かの間違いじゃ……」

「嘘を申すな!!」

びりりと空気が震えるほどの気迫で大きな声をあげたへらは、美しい顔を怒りに染めてびしりとユカリを指さした。

「生意気で愚かな娘。身の程を知らぬ娘。その傲慢さ、今再び思い知るがよい！」

そうして、彼女は今に至るのだった。

口がきけなくなる上に、女神達と離ればなれにされるといって、絶体絶命の状態に。



## 5 接触

(ア、アテナ様あ……ニケ様あ……アフロディーテ様あ……！)

どことも分らない荒野。本当に天界なのかと疑いたくなるような、土と草の寒々しい景色。

辺りを見回しても宮殿はおろか家すらなくて、さらに不安を煽りたてられた。

遠くに見えるのは街だろうか。家らしきものがぎゅうぎゅうと集まっついて、神々のいる場所ではありえないその光景に、少なくともここが神の住まう領域ではないことがわかった。

となると、答えは一つ。

英雄と呼ばれる人々、そして天に召されることを許された人々が住む領域だ。ここから神々の領域までは、かなりの距離があるはず。

アテナと離ればなれにされてしまった。いくら心の中で必死に呼んでみても、あの凜として優しい声が応えてくれることはない。

最後に目に焼きついたのは、ヘラの燃えるような瞳。

とても綺麗な女神だったが、怒りに染まった双眸が恐ろしくて、よく見ることができなかった。

どうして自分が目をつけられたのか、ユカリにはさっぱりわからない。特にヘラの気に障るようなことは……。

していないと思いかけて、ふと一人の男神を思い出した。

もしかして。

毎日のようにやってきてはアテナにフルボッコにされていた、あの男。

きらきら光る金髪が印象的だった、あの男。

もしや、あれがゼウス？

あんなのに追いかけて回されただけで、嫉妬の対象になったのか？

思い返せば、「いい加減にわきまえなさい、この好色親父！」「生みの親に向かってその態度はなん……ぎゃあああああ！！」とかいう会話を遠くで聞いたような気がしなくてもなかった。

あれが全能の神ゼウスかと疑いたくなるような言動だったが、「ユカリは何も気にしなくていいのよ」と甘やかすアテナに従っていたのが運の尽きだったのかもしれない。

ヘラ様の怒り、半端ない。

というか、呪いの程度半端ない。

女神の嫉妬恐ろしい。

そして、とぼっちり食らった私ドンマイ。

この状態では、男神が近くにいっても悲鳴をあげることすらできない。

ひたすら走って逃げても、遊んでいるだけだと思われるだろう。

最悪だとげんなりとしつつ、それでもどこかにいるであろうアテナ達を探して、ユカリはとぼとぼと歩きだした。

「ごつごつとした岩場が、裸の足の裏に痛い。

アテナと暮らしていたあの場所が、まるで夢のようだ。

(だーれーかー！ 女の人限定でー!!！)

心の中で叫んでいると、目もくらむような美女が向こうからやってきた。

やった！ と喜んだのもつかの間、ユカリは微妙な違和感に眉根を寄せる。

(……うん?)

女性にしては、妙に肩幅が広いような気がする。それに、歩き方もどことなく粗雑なような……。

いや、でも、あんな綺麗な男の人はいない！ はず！

そんな思いを胸に、必死に足を進める。

精神的にも肉体的にも、かなり限界がきていた。

精神的な支えを求めて、最後の力を振り絞る。

倒れそうになりそうな身体で、いや実際ほとんど倒れこむように、はっしと腕にすがりつく。そして、支えてくれた腕の力に、ぞわりと総毛立った。

……この力強さ、この筋肉質。

どう考えても、女性じゃない。しかも気配からして、神じゃない。

ということは。

ぞぞぞぞぞぞぞつと音を立てながら、全身から血の気が引いた。

力の限りに殴りかかったのに、自慢の拳は男にかすりもしなかった。

それどころか、「うおっ」なんてどこか間の抜けた声と共に、軽々と避けられてしまう。

悔しさにぎりぎり歯ぎしりをするユカリに、男が声をあげて笑った。

(何よ何よ何よ、何がおかしいのよ!!)

目に力をこめて睨みつけると、男の笑い声がさらに大きくなる。

「お前、変な奴だな！ さっきまで泣きそうだったのに、もう殴る元気があるのかよ」

ひいひいと笑いながらそう言った男は、笑いすぎて目尻に浮かんだ涙を拭いながらユカリを見る。

「しっかし、何だってまたこんなところにいるんだ？ こころ辺には誰も住んでないはずだが……」

(……ここら辺って、ここはどこよ?)

「迷子にしちゃあ、大きすぎるしな。身なりも見てくれもいいし、  
どこかから攫われたか? お前、どこから来たんだ? 送ってって  
やるよ」

ほれ、言ってみろ。

殴りかかった事など気にもとめず、男は「ん?」と小首を傾げる。  
あまりにあっけらかんとしたその態度に、ユカリは思わず毒気を  
抜かれてしまった。

何なんだこいつは。

馬鹿か、馬鹿なのか。

こちらが殴りかかった(しかも力の限りに)というのに、気にも  
とめていない。しかも親切にしてくるとは。

下心があるようには見えなかったが、思わず探りを入れるような  
目つきになってしまう。心の中で散々こけにしたところで、はたと  
気づいた。

この男、神だったらどうしよう。

血の気が一気に引いていく。

ざざっと音までしそうだ。

人間だとばかり思っていたけれど、ここがどこかわからない限り、  
神だという可能性も否定できないのだ。大切に囲われていたのが裏  
目に出て、服装だけでは判断できないのが悲しい。

慌てて非礼を詫びようとして、声が出ないことをようやく思い出

した。

「これでは、何を言おうとしても伝わらない。仕方がないので、棒きれを拾って、地面にへたくそな文字を書いた。」

『ごめんなさい』

アテナに教わった、ギリシヤ語。

派生がありすぎて覚えるのに苦労したのだが、アテナの優しく丁寧な指導の賜で、外国語が苦手な日本人であるユカリも、なんとか簡単な単語ならば書けるようになっていた。

「ん？ ……お前、もしかして」

『声 である ない』

「……声が出ないのか。名前は書けるか？ どこから来たんだ？」

『ユカリ。きた 場所 わかる ない』

男の声がぐつと優しくなった。

そうか、と呟いたその男に頭をなでられそうになったので、ユカリはばしりと振り払って威嚇しておく。

一瞬間の抜けた顔になった男は、次いで吹き出した。

「お前、男が嫌いか。そうかそうか」

『はい』

「ユカリ、か。誰と一緒にいた？」

『アテナ様』

「あー……」

簡潔な答えに、男が何とも言えない表情になる。

上を見て、下を見て、右を見て、左を見て。

「あの、な。悪いことは言わねえから、アテナのところに帰るのは諦めろって」

何故だと思わず睨むと、男は乱暴に頭をかきながら、非常に言いにくそうにこちらを見た。

ユカリは何も悪いことをしていないと明言できる。  
むしろ、とぼっちり受けた方だ。何が悲しくて、夫婦喧嘩のいざこざに、何の関係もない自分が巻きこまれないといけないのか。

「アテナと一緒にいたって事は、あれだろ。噂のヘラに呪いかけられた奴だろ。俺達英雄にまでお達しが来てんだって、アテナのところには案内するなっさ」

英雄？ それならば、ユカリが遠慮する必要など、始めから

なかったのだ。

いやいやそれよりも、アテナのところに帰れない？

どうしてそこまでする必要があるのでろうか。

恐るべし、ヘラの執念。

神の嫉妬怖い。

関わりたくなかった。

というか、思いつきり濡れ衣なんですけど！

『帰りたいたい』

『だーかーらー、それはできないんだって』

『帰りたいたい』

『無理だつて。逆らったら俺が何されるかわかんねえもん』

『帰りたいたい』

「ああもう、お前もいい加減しつこ」

苛ついたように彼女を見た男は、ぎよっとしたようだった。それにも構わずに、無言でぼろぼろ泣きながら、同じ文字を書き続ける。

アテナ様、アテナ様、助けてください。私はここです。お願いです、見つけてください。

ここはどこですか、どこまで行けばお会いできますか、どうしたら見つけていただけますか。私はどうしたらいいのでしょうか。

「……………っ！！」



アテナは全力でユカリを守ると約束してくれた。  
念じれば必ず叶うと信じて、同じ文字をひたすらなぞり続ける。  
何度も、何度も。

その様子を見た男は、諦めたように大きく息を吐いた。

「……ああ、くそ！」

ぐしゃぐしゃと頭をかき乱して、忌々しげに舌打ちをし、そうして彼女に手を差し出す。

もちろん、即行はたき落とさせていただいた。

「俺はアキレウス。アキレウスだ。お前が落ち着けるところを見つ  
けるまで、面倒見てやる。いいな？」

『男嫌』

「あー、はいはい。わかったわかった。我慢しろ」

ぐしゃりと頭をなでられたユカリが、その手を力の限り叩き落と  
したのは言うまでもない。

## 6 美女なのに美女じゃなくて変人だった

アキレウスは本当に変人だった。

「俺のことは女だと思えばいい」などと言ったあげく、それでもやはり男は男だとつたないギリシヤ語で主張するユカリに、「いいから思えやコラ」とすごんできた。

負けるものかと精一杯虚勢を張ったユカリだったが、やはり怖いものは怖い。

(額に血管浮いてた。本当にこめかみに血管が浮き出てる人、初めて見た。本気で怖い)

小動物のようにびくびくしながらそんなことを思い返すユカリは、しかし譲れない一線があった。

女と思えと言うならば、後生だから女装してくれ。

そう頼むと、本っ当に嫌そうにしながら、渋々女装をしてくれた。

突然の頼みなのに、何故女物の服を持っていたのだろうか。

しかもやけに似合うあたりが微妙に怖い。

元々女性と間違えたぐらいだから美人だとは思っていないが、女装をすると本物の女性にしか見えない。

……これで英雄か……。

ユカリがしみじみしてしまったのも無理はないだろう。

筋肉はしつかりついているのだろうが、優男に見えて英雄とは、やはり神話の世界はよくわからないものだ。

ただ、いくら邪険にしても怒らないし、カ一杯殴りかかっても何も言わない。

さらには、何だかんだ言ってユカリの面倒を見てくれるから、俗に言う「いい人」なのだろう。

アキレウスは何を言うでもなく、黙々と歩き続ける。土ばかりが目立ち、小石が足の裏に当たって痛かった地面から、いつの間にか草が多く茂った地面へと変わっている。

それにしても、一体いつまで歩けばいいのだろうか。

しゃべることができないユカリは、くいとアキレウスの腕を引いて、注意をこちらに向けた。

「ん？ どうした？」

振り向いたアキレウスに、ジェスチャーで書くものをくれと訴える。

『今 どこ 向かう？』

「ああ、とりあえず、俺の家だ。拠点がなきゃ、どうにもなんねえからな」

もらった羊皮紙に懸命に書きこむと、アキレウスは嫌な顔一つせ

ずに教えてくれた。その親切さに、ユカリは彼を信用してもいい気がしてきた。

これは断じて刷り込みなどではない。絶対ない。  
助けてくれたからって、そこまで単純な人間ではない。

呪文のように胸の中で唱えつつ、ひよいひよいと進んでいくアキレウスの足の速さに何度も殴りかかりながら、ユカリが連れてこられたのは簡素な一軒家。

あたりには一軒も家がなく、ただ森を挟んだ遠くに街が見えるだけだった。

「入れよ。お前の住む部屋ぐらいはあるから」  
『ありがとう』

おそるおそる書いた羊皮紙を見せるユカリに、アキレウスはにいと笑ってうなずいた。ちなみに、頭をなでようとしたらしい手は、途中でぴたりと止まって下に下ろされている。

「お前、やっぱりアテナ達の教育がよかったんだな。挨拶はきちん  
と書けるのか」

『挨拶 大事 アテナ様 言っ』  
「だよなあ。うん、お前気に入った。好きなだけここにいろよ」

アテナのところ以案内はしない。けれど、代わりにここに住んでいいと言ってくれる。

この人にすがるしかないからと不承不承ついてきたユカリだが、アキレウスだけは男でも気を許してもいいような気がしてきた。

……女性の格好をしているからというのもあるとは思っただが。

張り詰めていた気を少しだけゆるめて、ユカリはこくりとうなずいた。アキレウスが押さえている扉から中に入る。

もっと乱雑としているかと想像していた室内は以外にも綺麗に片づいていて、ますます男の家だという印象が薄れていく。

むしろ小綺麗なあたり、一人暮らしの几帳面なOLのようだ。

都内に住む姉の部屋を思い出して、思わずしんみりしてしまう。今頃姉はどうしているのだろうか。

そんな考えがユカリの脳裏をよぎり、意識は完全に元いた世界にシフトする。

夏は暑くて、あれほど嫌いだったコンクリートジャングル。

けれどユカリは、休日にヒールのある靴を履いて、その上を闊歩するのが好きだった。

かつん、かつんと音を鳴らして歩くと、少し大人になった気分になれたのだ。

ませてるんだから、と姉に笑われたが、高校生のユカリにとって「大人の女」は憧れだった。姉には絶対に言わなかったが、しっかりと自立して働いている彼女を、ユカリは尊敬していた。

いつかきつと、自分も姉のように自立するのだ。そう決めていたはずなのに、今の状況はどうだろうか。

誰かに頼らなければ何もできない自分を、ユカリはこっそりと自

嘲した。

「どうした？」

ぼんやりしていたように写ったのだろうか、アキレウスがユカリの顔を覗きこんでくる。

それに曖昧に笑い返して、何でもないとかぶりを振ったユカリに、アキレウスは小さく肩をすくめた。

深くは追求しない、そういう意味だろう。

「こつちだ」

お前の服も用意しねえとなあなどと呟いているアキレウスの後ろをついて歩きながら、ユカリはこつそり真つ白な大理石にそつと手を滑らせる。

……アテナの宮殿と、同じ素材。

あそこよりもずつと質素だけれど、同じような柱。

思い出すだけで涙がこみ上げてくるが、男の前で涙を見せるなど、ユカリにとっては言語道断だ。もう一度アテナに会えるまで、そして元の世界に戻るまで、絶対に泣くまいと決心する。

ぐいと袖でにじんだ涙をぬぐったところで、アキレウスの足が止まった。

どうやら、彼女のものになる部屋についたらしい。

素朴な木製の扉。

取っ手は銅でできているのか、僅かに緑青が見える。

アテナの宮殿では金属の類は全て白金だったため、ユカリの目には新鮮に写った。

「ここ、自由に使っていいぞ。たまに変な奴来るけど、まあ気にすんな」

『はい。ありがとう 優しい アキレウス』

書きにくい手元で懸命に書いて見せると、アキレウスが小さく苦笑する。

「それにしても、お前の文法滅茶苦茶だな。アテナも短期間では教えきれなかったか」

『アテナ様 違い 私 悪い』

「ああほれ、その動詞の使い方。活用間違ってるっつーの。……  
教えてやるからこっち来い」

アキレウスは呆れたようにため息をつくど、椅子を引いて顎でそこを示した。

座れという意味だろうと察し、ユカリもおとなしく指示に従う。

それが地獄のような特訓の始まりだとも知らずに。

「違う馬鹿！ 何度言ったらわかるんだ！ そこは三人称だから語尾はこうだろうが！！」

(ひいひいひいひい！！)

『ごめなさい』

「阿呆！ また綴りが違うわ！！」

『ごめ ごめんんあさい？』

「違うわ阿呆！！ その脳味噌は綿菓子か！？ だから覚えられんのか！？」

(アキ、アキレウス、人格違う……！！)

そんなやりとりが続くこと数週間、ようやくアキレウスの愛の鞭(という名の暴言)も少なくなってきた。

ユカリの右手にはペンだがくつきりとでき、無駄にした羊皮紙は数知れず。

お世辞にもよくできた生徒とは言えなかったが、アキレウスは見放すことなくユカリに文字を教え続けていた。

ユカリ自身がトラウマになるほどに恐ろしかったというのは別の話として。



「おし。まあ、こんなもんだろ。わかんねえことがあつたらまた言えよ」

『はい。ありがとう、アキレウス』

さすがに今回は書けたらしく、アキレウスが満足そうにうなずいた。

本気で怖い先生だが、ユカリがきちんと書けた時には褒めてくれる。

しかも、いまだに彼女の要求通り、律儀に女装をしているものだから、女の人と暮らしているような錯覚に陥ることもしばしば。

男だけれど、アキレウスは嫌いではない。

アキレウスの家には厄介になり始めてから数ヶ月、ユカリはようやくそつ思えるようになった。

## 7 英雄は女装がお嫌い

ふと思った。

アキレウスはどうして女装が似合うのだろうか。というか、そんなに板についているのだろうか。

化粧も本物の女性と同じくらい、下手をすれば女性よりもうまいかもしれない。

何の疑問も持たないまま何ヶ月か過ごしてしまったユカリだったが、そんな疑問がわいて、何となくアキレウスに訊いてみた。本当に何となく。

その問いに、アキレウスの表情が一変した。

これ以上ないほど凶悪な顔だ。

訳もなく平謝りしたくなるほど怖い。

気の強いユカリが、本気で泣くかと思ったほど凶悪だった。

「そうかそうか、俺の女装はそんなに自然か……」

ふふふふふふふふ。

地底からわき出るような低い声で笑うアキレウス。目が据わっている分、逆に怖い。

もういい、何も言わないでとユカリが書く前に、彼は語り始めてしまった。

「元々俺はな、母親が『息子は戦争に出ると死ぬ』なんつー予言を

聞いたせいで、女しか住まない島に保護もとい幽閉されてたんだよ。男子禁制。もちろん俺も女の姿。小さい頃はまだよかったよ。ああ、よかったさ。けどなあ！ 思春期の俺にとつて、どんだけ苦行つませりゃ気が済むんだコノヤロウ！ てな感じだったな、あれは」

ふふふふふふふふ。

また不気味な笑い声（もう笑い声ですらない。乾ききっている）を発して、アキレウスが手に力を入れた。

ちようど？こうと手に持っていたリンゴが握りつぶされる。

「島から脱出する手段なんてありやしない。泳いで逃げるには、周りに島がない。そんな孤島に！ 女に囲まれて！ 女の振りをする俺って一体何なんだ！？ とか腐ってたら、とある国の王にだまからかされて、戦場へ引つ張り出されたわけ。まあ、島から出られたのは嬉しかったけどなあ。あいつ、やることなすこと破茶滅茶だったからなあ……。戦争もめんどくさかったし」

アキレウスが遠い目になる。よほどその王に振り回されたのだから。  
う。

だから面倒見がいいのかと納得してしまうユカリだった。  
彼からはどう見ても、苦勞人氣質が溢れ出ている。

……アキレウス？ 英雄アキレウス？

どこかで似たような名前を聞いたことがあるような。

小首を傾げたユカリが、唐突にひらめいた。

（あああああ、アキレス！！ アキレス腱で有名なアキレス！）

え、アキレスって女装してたの？

しかも、英雄とか言われてる割に、戦争嫌だったの？

幼い頃に神話で読んで想像していたアキレス像と、今日の前にいるアキレスにギャップがありすぎて、ユカリの頭の中でどうしても結びつかない。

どうしようと悩んだ結果、アキレスが怖すぎるのと、ギャップのせいで同一人物と見なすのは無理だと判断して、アキレスについてはそれ以上考えないことにした。

後から思い返しても、ユカリのこの判断は賢明だったと胸を張って言えるだろう。

この先々でアキレスに女装について言及した男は、例外なくフルボッコだったのだから。

## 8 こちらからお断りいたします

断りなく家を出るな、とアキレウスはユカリに言った。

本当なら彼女を匿うのも危険なのだ。

ヘラに知られたら、どんな罰を受けるかわからないのだ。

どんだけ恐れられているんだ、ヘラ。

ゼウスよりも最強なんじゃないかと思えてくる。

というか、万能の神なら、奥さんの手綱もしっかり握っておいてくれ、ゼウス。

不用意に男に会わなくて済むから、ユカリにとっては嬉しいことでもある。だが、外での用事の一切を引き受けてくれるアキレウスには申し訳なくなってしまう。

一度そのことで謝ったら、「俺はそこまで鬼畜に見えるかこの馬鹿が」などということ言われたので、それきり言わないようにはしている。

だがしかし、やっぱり申し訳ない。せめて家の中のことはしっかりとやらねば！ と、両手を握りしめるユカリであった。

女装をする男と、言葉を話さない東洋人の女。

そんな奇妙な共同生活にも、互いにだんだん慣れてきたある日のこと、突然珍客が訪れた。

というよりも、アキレウスが連れてきた。

男嫌いのユカリのためにと、極力男を家に上げないようにしていた彼にしては、珍しいことだ。

反射的に隠れようとするユカリを手で制し、気まずそうに頬をかいている。

「待てつて、ユカリ。こいつは悪い奴じゃない……多分。きっと。おそろく」

「おいアキレウス、何だその紹介は。私の品性が疑われるではないか」

「てめえの行動を胸に手を当てる考えてみる」

言葉だけ聞けば非常に険悪な状態だが、どちらも気にはしていないようだ。彼らの仲の良さがうかがえた。

おそろくは、ユカリと彼女の親友のように。

じゃれ合う（少なくともユカリにはそう見えた）彼らを見ていると、些細なことで冗談を言い合っては笑う、ユカリ達自身を彷彿とさせた。

彼女とも、こんな風に悪態をつき合っては笑い合っていた。

どんな事でも、それこそ家族にも秘密の相談でも打ち明けられた、一生涯の親友。

互いに支えられ合って毎日を過ごしていた。

彼女は今、心配してくれているだろうか。

意外に気の弱いところがあつたから、泣いてはいないだろうか。弱さも強さも、補い合つていた二人だったから。

生まれる場所を間違えた双子だね、と笑い合つた彼女の笑顔を、ユカリははつきりと覚えている。

ぼんやりと思考の海に沈んでいるユカリを不審に思ったのか、アキレウスが彼女の顔を覗きこむ。

「ユカリ？ どうした」

その声に我に返つたユカリは、予想以上に近くにあつたアキレウスの顔にほんの少しだけ後ずさつた。敏いアキレウスはその僅かな動作にも気づいたようで、苦笑して身を引く。

その行動にほうと息を吐いたユカリは、改めて何でもないとかぶりを振つた。

『少し考え事をしていました。すみません、お客様の前で』

走り書きの羊皮紙を渡すと、アキレウスはそれ以上客人がユカリに近づかないように腕で牽制しながら、その客人をくいと顎で示した。

「こいつはアポロンだ。まあ、アテナの所にいたお前なら、聞いたことぐらいはあるかもしれねえが……」

アポロン。

と聞いてまず思い出すのは、アルテミスの苦々しい顔だ。

「あの愚弟め」と言っていたような気がする。その横でアテナが、「あの好色最低男のせいで、またニンフが犠牲に」と憤慨していたような気がする。

その時給仕をした茶葉の種類まで思い出しつつ、ユカリが微妙な距離を作ったのは、まあ仕方がないことだろう。

「おい、何だその距離のとり方は」

「正しい判断だ、ユカリ」

心外そうに顔をしかめるアポロンと、したり顔でうなずくアキレウス。

どちらがユカリにとって信ずるに値するかと問われれば、間違いなくアキレウスを選ぶ。

ユカリの中でのアポロンの地位は、地を這うほどに低かった。

「何だ、この小娘は。この私が直々に、予言をしてやるつと来てやったというのに」

偉そうにふんぞり返り、目を細めてユカリを睨むアポロン。その姿に、ユカリは小さく首を傾げた。

彼女の知識の中では、アポロンはアルテミスの対となる存在。太



陽の守護神ということしか項目にない。

それがどうして予言につながるのかと眉根を寄せたユカリの疑問を、アキレウスが正確に読み取ったようだ。

「ユカリ、こいつは一応、予言の神だ。性格的にはちょっとアレだが、予言に関しては信頼できるぞ」

「一言多いわこの阿呆が。 まあいい。その娘、アキレウスに免じて、特別に、予言を行ってやる」

やけに「特別に」を強調していたが、アポロンは不敵な笑みを浮かべると、おもむろに目を伏せた。気分でも悪くなったかと心配したユカリが一步踏み出したところで、アキレウスに手振りで見つとっていると制される。どうやら、彼は「予言」の最中らしい。

やがて瞼を上げたアポロンは、何度かユカリを見ては眉根を寄せた。

「『最終的には己の望む道を歩む』……か。途中経過がさっぱり見えんのは何故だ、アキレウス」  
「知るか。俺に訊くな」

どうやら、中途半端な予言の結果が、アポロンの予言神としてのプライドを刺激したらしい。

幾度も予言を行っては同じ結果に眉根を寄せ、最終的には諦めたようにため息をついた。

「……ユカリ、だったか？　おい、ちんくしゃ。この予言がはつきりするまで、不本意ながら私はお前の力になるう。これほどすつきりしない予言は、生まれてこの方初めてだ」

「おいアポロン、ユカリは男嫌い」

「何度も言わずとも分かっているわ、たわけが。それに、私にも好みというものがあるからな」

お前など眼中にないと言外に言われ、ユカリのこめかみが小さく引きつる。

だが、言い返すにも声が出ない上、そもそも口もききたくなくなっていた。

彼女がとつた方法は、ただ一つ。

『奇遇ですね。私にも好みがございます』

丁寧に羊皮紙に書いた文字を、ひらりとアポロンに見せつけただけだった。

## 9 手負いの子猫

アポロンを紹介した当初、ユカリは酷く警戒していた。というよりも、怯えていたという方が正しいのだろうか。

普段自分と生活している時とは全く違う硬質な雰囲気、アキレウスは正直戸惑った。

男が嫌いだと言いながら、出会った当初からユカリはアキレウスを、本当の意味で拒絶したことはなかった。だから、それほど重傷だろうとは思わなかったのだ。

アポロンの好みは（不本意ながらも）熟知していたし、それがユカリに当てはまらないことも知っていた。

あれほどアテナを乞い焦がれているユカリと共に生活をして、元々人の良いアキレウスが、情が移らないはずがない。

直接案内をしてやることは叶わなくとも、せめて手助けをしてやりたいと思ったのは、彼にしてみれば当然の流れだった。

けれど、アポロンを家に上げた瞬間のユカリの表情。

見かけによらず聡い彼女は一瞬でそれを覆い隠したが、アキレウスは読み取ってしまった。

裏切られた。

翳った瞳の刹那の絶望が、その一言を雄弁に語っていたのだ。そこでようやく、アキレウスは己の認識が甘かったことに気づいた。

何故男が嫌いなのか、ユカリに尋ねたことはない。  
その必要を感じなかったし、無闇に詮索することは好きではなかった。

そのささやかな気遣いが、裏目に出てしまったか。

内心顔をしかめたアキレウスだったが、ユカリがすぐに何もなかったような表情に戻ったので、自分もあえて普通に振る舞った。

予想通りにユカリはアポロンの守備範囲外だったし、ユカリも何食わぬ顔でアポロンに対応していた。

ユカリの態度はアポロンが尋ねてくる回数に応じて軟化していった。十歩以上近寄ろうとはしないが、彼が顔を出せば用意していた『いらっしやいませ』の羊皮紙を見せる程度にはなっている。

それきり姿は現さないものの、木製のテーブルにはいつも飲み物と菓子類が整えられ、彼女なりに必死に歩み寄ろうとしているのがわかった。

それは彼女が男性恐怖症を克服しようとしているのか、それともアキレウスの親しい相手だからかはわからない。

けれど、ユカリのその行動を、アキレウスはとても好ましく思っていた。

アポロンもまた、そんなユカリにだんだんと興味を持ったのか、行儀悪く菓子をつまみながら「あの平凡顔はどうしている？」などと訊いてくるようになった。

素直でないその態度に苦笑しながら、「手を出すなよ」と冗談交じりに釘を刺すのが、アキレウスの習慣と化している。

アキレウスは親愛の情と信じて、ユカリを守り続けている。

「裏切られた」と感じるほど、彼女が自分を信頼していることに気づかずに。

そして、彼女が自分だけに見せる笑顔に、少しだけ優越感を感じていることにも気づかずに。

## 10 子猫、避難する

このところ、アキレウスの家にアポロンが頻繁にやってくる。アキレウスの客人だからと精一杯のもてなしをしているものの、ユカリは内心疲れきっていた。

出会い方も第一印象も最悪。

そんな相手がすぐ身近にいることもストレスになっているし、何よりも彼と話している時のアキレウスの雰囲気嫌でたまらなかった。

ユカリと二人だけの時は、常に中性的なアキレウス。

その彼が、アポロンと話している時は、完全に「男」に見えるのだ。

初めてそれに気づいた時、今までアキレウスがどれだけ気配りをしてきていたのかを思い知った。それは無意識の行動だったのかもしれないが、今までのアキレウスを普段の状態だと信じていたユカリには、大きな衝撃だった。

だからユカリは、アポロンがいる間、なるべく自室に閉じこもっている。

結局自分は、自分に甘いのだとユカリは一人自嘲した。

簡素とはいえ、必要最低限のものは揃えられた木製の家具。

それなりに寝心地の良いベッド。

ここに来た当初は錆びついて動かなかった窓の留め具も、今では綺麗に磨き上げられている。

守られているのだ。

ユカリは彼に、何も返せないというのに。  
アテナの元に帰りたいと子供のように駄々をこねながら、逃げてばかりだというのに。

ユカリは自分がどういう人間なのかをよく知っている。  
だから、自分が嫌いだった。

卑怯者。

臆病者。

優柔不断。

事なかれ主義。

自分勝手。

数えればいくらかでも言うことができる。  
アテナと出会い、尽くすようになってからは、それらが消えてなくなったような錯覚に陥っていた。

あの場所は、あまりにも綺麗すぎたから。  
優しく真綿でくるみこんで、大切に大切に扱われたから。  
自分が優しい人間になれたのだと、そう思い込んでいた。それはア  
キレウスと生活をするようになって、違和感なく続いていた。

けれど、アポロンという存在によって、ユカリの温かい幻想は粉々になった。

だからユカリは、アポロンを嫌う。

自分自身を嫌うのと同じように、アポロンを嫌う。

しなやかな筋肉、傲慢であっても許されるほどの優雅な振る舞い、  
低く甘く響く声。

「男」をはつきりと体現しているアポロンの男性性の上書きをして、彼を嫌う。

そうしなければならぬほど、ユカリは小さくて卑怯な人間だった。

(……………だいきらい……………)

自分に向けて、アポロンに向けて。

両腕できつく膝を抱きかかえながら、薄暗い部屋の中でユカリはそっと独りごちた。



## 11 不可思議な邂逅

暗い冥い、闇。

自分が本当に存在しているのか、それすらもわからなくなる錯覚に陥る。

一寸先も見えないほどの闇の中、どうしてこうなったんだろうとユカリは一人首をひねった。

彼女は確かに、与えられた自室のベッドで、眠ったはずだ。

しかし、夢にしては、感覚の全てが奇妙に現実味を持ちすぎている。

ここは一体どこなのだろうか。

『娘よ。名もなき娘』

思い当たる場所もなくユカリが困っていると、突然空間を震わせる低い声がした。

轟くようなそれに驚いて、思わず数歩後ずさってしまふ。本当に後ずされたかどうかも怪しかったのだが。

「だ……誰？」

『哀れな娘。我が娘』

「いや、こんな不可思議な父親を持った覚えはないんだけど」

会話にもならない言葉のやりとりのあと、ようやく自分がしゃべれていることに気づく。

何故かと首を傾げる暇もなく、またあの低い声が響いた。

『哀れな娘よ。お前はもう、二度と元の世界には戻れまい。その魂がある限り』

「は？　ちょっと待ってよ、それってどういう意味？」  
『名もなき我が娘よ。なんと哀れなことが』

低い声は楽しんでいるようだ。くつくつと笑い声が聞こえ、声はどこまでも嫌味たらしい。

それに苛立ちが募るのを感じながら、見えない床を気持ちだけ足で蹴りつけた。

かつん、と硬質な音がして、思いがけず響いたその大きさに、ユカリはびくりと身体を震わせる。

そんな臆病な自分を隠すように、彼女は一段と大きく声を張り上げる。

「どうでもいいから、早く帰して。どうせあなたがここに連れてきたんでしょ？　声も出るようになったし、アテナ様のところに戻らなきゃ」

『声？　ああ、お前は我が娘に声を奪われていたな。案ずるな、出るようになったのは一時のぎだ。地上に戻れば、再び元通りに出なくなるだろうって』

「な」

何を、言っているのか。

現にこうして声が出ているというのに、「ここ」を出ればまたしやべれなくなる？

冗談じゃない。

ユカリは、自分の顔から血の気が引いていくのを感じた。

「あなたは誰！？ どうして私をここに連れてきたの!？」

『お前の絶望に沈む顔を見たかったからだ、我が愛娘』

「私はあなたの娘なんかじゃない!！」

噛みつくように反論すると、また低い笑い声が聞こえた。

聞けば聞くほど苛つくその声に怒鳴ろうとしたその時、ようやく  
笑いをおさめた声が、不気味に響く。

『我が名はクロノス。どうあがこうと、お前は運命さだめからは逃れられぬ』

闇は、その言葉と同時に終わった。

\*\*\*\*\*

「ユカリ……おい、ユカリ！」

(……アキレウス?)

聞き慣れた声に重い瞼を押し上げると、心配そうなアキレウスの顔が飛びこんできた。

瞬間的に身を強ばらせたユカリを見て、アキレウスが苦笑しながら一歩離れる。

それに安心しながら、心のどこかが苦しくなった自分に、ユカリは気づかれないように眉根を寄せた。

辺りを見回せば、既視感のある荒野。

ユカリは一瞬、時間が巻き戻ったのかと驚いた。即座にそんな馬鹿げた考えは切り捨てたが。

「  
」

ありがとう、と言ったはずだった。

しかし、出てきたのはひゅうひゅうという風が抜ける音だけ。

あの場所じゃべれたということとは、もしかしたら治ったのかも

しない。

そんな微かな希望にすがって声を出したつもりでも、やはりクロノスの言う通り、ユカリの声はひとかけらも出てくれなかった。

『ありがとう、アキレウス』

仕方がないので木の枝を取り上げて枯れ果てた地面に書くと、いってことよと頭を叩く　振りをされた。

ユカリはこういう風に、自分からは絶対に触れない、彼のその優しさが好きだった。

彼女から彼に触れたことも、またないのだけれど。

「帰るぞ。……　　たく、何だってこんな辺鄙なところまで来たんだ

「よ

『ここはどここ？』

「お前が倒れてた場所に近い。よくここまで来れたな」

最初に倒れていた場所。アキレウスとユカリが、出会った場所。ここから彼の家までは、かなりの距離があったはずだ。

『クロノスって人に会った。知ってる？』

クロノス、の綴りが怪しかったが、どうやらアキレウスには充分伝わったようだった

。その表情がさつと固くなる。

「……クロノスだと？」

『知ってるのね？』

「知ってるも何も……お前、タルタロスに行ったのか？」

『タルタロス？』

お互い訊き返すような状態になってしまったけれど、ユカリも、そしておそらくアキレウスも、状況がいまいちよくわかっていない。二人揃ってしばらく見つめあった後、らちがあかないと思ったのか、アキレウスが小さく息を吐いて説明を始めた。

「タルタロスは、地底の奥深くにある場所だ。ゼウスが自分の父神を幽閉している」

『幽閉……じゃあ、私が出たのって』

「そう。タルタロスの罪神、ゼウスの父。クロノスだ」

## 12 神というものは

彼が言っているその意味を理解した瞬間、一瞬目の前が真っ暗になった。

神に向かって無礼をはたらく意味を、ユカリの脳が理解することを拒絶したのだ。

おおらかな神は許してくれるが、神は大抵人間を見下しているもの。

アテナやアルテミス、アフロディーテ達が、談笑しながら『己を馬鹿にした無礼な娘』への仕打ちを披露しあっている横にいたユカリは、その恐ろしさを身にしみてわかつていた。

ユカリに対してあれほど優しくかったアテナ達でさえそうなのだ、縁もゆかりもない神の怒りはどれほどだろうか。想像しただけで、ユカリは恐怖に身震いしてしまった。

実際には、ユカリの考え方は間違っている。

アテナ達が優しくかったのは彼女が「保護する対象」であったからであって、もしもユカリと何も関係がなかったら、無礼を働いた時の女神達の対応は百八十度違っていただろう。

それを知らないユカリは盲目的にアテナを信頼しているのだが…  
…今の彼女にとっては、それが幸いした。  
アテナさえ信じることができなくなったら、きっとユカリは壊れてしまうから。

内心でアテナに助けを求めつつ、ユカリは姿が見えなかった「クロノス」の言葉を思い出していた。

そして、不意に最後の一言が脳裏に響く。

『運命からは逃れられない』

一体どういう意味なのだろうか。

それに、何故あの場所では声が出せた？

夢だと片づけてしまえば簡単なこと。けれど、ユカリはクロノスという神を知らない。そうそう都合よく、符号が一致するなどということがあるのだろうか。

『あの方……私のこと、娘って……』

震える手でそう綴れば、アキレウスの片眉が跳ね上がる。そのまましばらく何事かを考えていたアキレウスは、不意に厳しい表情で彼女の手をつかんだ。

ぞわりと背中が泡だったユカリが反射的に振り払うと、アキレウスは我に返ったように謝罪を口にする。

「悪い。だけどユカリ、こりゃ大事かもしんねえぞ」

（え？）

目を見開くユカリに、しかしアキレウスの表情は固いまま。

「誰にも知られずに人一人を引っ張るなんてこと、そうそうできることじゃねえ。あのアポロンだって、あれでも高位神の一人だ。何



「かありや、すぐに気づける」

そのアポロンも気づけなかったということとは。

「お前が一人であそこまで移動できたとは、到底思えない。つてことは、だ。本当にクロノスにさらわれた可能性が高い」

ぞくり、と背筋が凍った。

「タルタロスはオリュンポスの神々の力が及ばない。例外はゼウスだけだ。ユカリ お前、あそこで他に何を言われた？」

「何も。ただ、私が あの方の娘だ、つて」

「娘？ お前が、クロノスの？」

ユカリが繰り返し綴った言葉に、アキレウスがまた片眉を上げる。どういう意味だと、その瞳が雄弁に語っていた。

ユカリ自身も納得できていない。

ただの人間のはずなのに、何をもって娘などと言われなければならないのだろうか。

おそろおそろ彼の顔色をつかっても、ユカリには何も読みとることができない。

そのまま何事かを考えていたアキレウスは、ややしてよし、とうなずいた。

「知り合いに物知りのケンタウロスがいるから、そいつに訊いてみる。何か手がかりがあるかもしれん」

「ケンタロス？」

「阿呆、ケンタウロスだ。綴りはこう！ 上半身が人間、下半身が馬の種族だ。大勢の英雄が奴の教えを受けてる」

……………人面馬……………。

「いやいや、上半身だけが人間だから……………この場合は何て言えばいいんだろ？」

「なんかもう、ギリシャ神話って何でもありだな。」

「それ以前に、腕二本に足が四本あるんだろ？」

「だとしたら、哺乳類というよりも昆虫に近い？」

「……………考えていたら気持ち悪くなったから、これ以上はもうやめよう。」

首を傾げたユカリだったが、文字の間違いから発展したアキレウスの指導をびしびし受けながら、ケンタウロスについてそれ以上考えることはやめることにした。

物知りで何かを教えてくれるなら、もうそれでいい。

そんな風に考えて期待していたユカリだったが、後日アキレウスからもたらされたのは、がっかりするような内容だった。

「あいつも知らないってよ。クロノスの娘は、今いる三柱だけのは

ずだと」

『そっ』

「となると クロノスの言う『娘』は、つじつまが合わなくなるな」

『うん。でも、確かにそう言われたの』

そこまで書いた時、ユカリはもう一つの不思議なことを思い出した。

あの場所では、何故か話すことができた。

けれどクロノスは、あの場所でしかしゃべれないと言っていたし、実際それは当たっていた。

そのことを（だいぶマシになったギリシャ語で）知らせると、アキレウスはまた難しそうな顔をしてしまった。

ユカリの想像通り、普通では考えられないことなのだろう。

散々うなつたアキレウスに告げられたのは、しかし意外な言葉だった。

「無理矢理考えるなら、やっぱりタルタロスだってことだろうな。

あそこは基本的に、ゼウス以外の神の力は及ばないって言っただろ

？ もしかしたら、それでヘラの呪いも一時的に解けたのかもな」

『そっか……』

仕方がないと自分自身に言い聞かせるものの、がっかりするのは止められない。

アキレウスの言うことが本当ならば、しゃべるためにはタルタロスに行かなければいけないことになる。しかし、行ってもいるのはクロノスだけだ。

ユカリが会いたいののはクロノスではなく、アテナ。行っても意味がない。

しょんぼりしながらぐりぐりと返事を書いていたユカリの頭に、ぽんと大きな手が乗った。

反射的にばしりと払い落としながら振り仰ぐと、アキレウスが温かい目で笑っている。

「心配するなつて。その呪いも、そのうち解く方法がわかるだろ」

『……触らないで』

「はいはいはいはい」

『誠意がこもってない』

「心からこめてるっつーの」

そんな言い合いも、もう何度目だろうか。

毎回毎回繰り返し返されるおかげで、ユカリが操る文句のバリエーションもずいぶん増えた。

まあ、それを教えてくれるのもアキレウスなのだが。意地悪なのか優しいのか、よくわからない。

けれど、泣きそうになる度にこうしてくれるのだから、きっと優しいのだろう。

少しだけ心が軽くなるのを感じながら、ユカリはそれを誤魔化すように、また文句を羊皮紙に書いた。

### 13 神殿へ

ユカリが彼の家に厄介になり始めてから、しばらく経った。

言いつけ通り一応はおとなしくしていたのだが、ユカリの性質上、じっと待っているだけというのは性に合わない。

どうしたらアキレウスの目を盗んで外に出れるのか、彼の行動パターンを盗み見しながら考える日々がしばらく続いた。

どうすれば、こっそり抜け出せるだろう。

毎日考えに考えたが、アキレウスの行動に隙はなかった。というよりも、英雄に一般庶民が勝とうとすること自体が間違っていた。

物音一つで目を覚ますって、普段からどれだけ気を張り詰めているんだ、アキレウス。

そんなんじゃないあ、そのうち神経すり減っちゃうぞ。

突っ込みどころの多い彼に頭を抱えるユカリ。

もちろん気配にも敏感で、ユカリが一人で庭で洗濯物を干しているだけで、「気をつける」と注意が飛んでくる。

過保護すぎないかと思いきや、多分元々お節介なのだ、ヘラクレスという男は。

ヘラが怖いのも本当なのだろうが、基本的に「いい人」だ。

本当に心配してくれている彼をだますのは忍びないけれど、やはり情報がほしい。

というわけで。

夜中にこっそり抜け出すぐらいしか、ユカリには思いつかなかった。

幸いにも、アキレウスの寝室と彼女の部屋は離れている。窓の外も、多少草が生えているとはいえ、土の部分だけ注意して踏めば、素人のユカリでも足音はたたないだろう。

アキレウスに気づかれないことが最重要課題で、ユカリの作戦が成功するかどうかの要だ。

何食わぬ顔をして、夕食を終えて。順番に湯浴みをして、居間で濡れた髪を布で乾かしながら、アキレウスからギリシャ語を習う。

だが、この後のことを考えると気もそぞろになってしまって、いつもよりもはたかれる回数が多かった。

側頭部が痛いですが、アキレウス。

羊皮紙って丸めると結構な武器になるんだね、初めて知ったよ。

痛む頭をさすりながら、最後の蝋燭をそつと吹き消す。夜闇の中に大理石の壁や柱が映えて、黒と白のコントラストが目まぶしいほどくつきりと浮かび上がった。

「お休み」

軽く手をあげるアキレウスにユカリも頭を下げ返し、自分の部屋に入る。ここまではいつも通りだ。いつもと違うのは、ここからだ。

アテナの宮殿を離れて幾月、ようやく履き慣れた靴を脱いで、そ

つと窓から外に出る。

草の部分を踏まないように細心の注意を払いながら歩き続けて、家が小さく見えるようになったところで、ようやく一息つく。

いくら音がするからとはいえ、荒野を裸足で歩くのは、慣れていないユカリには辛かった。

尖った石があつたのか、柔らかな足の裏に血がにじんでじんじんと痛む。

けれど、こんなところで挫けてはいられないと己を奮い立たせた。

目指すは、街との間に見える神殿。

そこに誰が祭られているのか。

それすらも知らなかったが、ユカリが頼る先はそこしかない。

神々との距離がちょっとあるここでは、神と連絡をとるのに神殿を使うと、アキレウスから聞いていた。

神の方も結構気軽に出てくるというから、ひよっとしたら誰か味方になりそうな神と話ができるかもしれない。

ユカリは、その数割にも満たない可能性に賭けていた。

痛みをこらえながらハンカチで血を拭い、歯を食いしばりながらしっかりと靴の編み紐を結ぶ。見渡す限りの荒野の先は、薄暗い森だった。

ここまで街と距離を置くなんて、アキレウス、ひよっとして人が嫌いなんだろうか……。

いらぬ世話まで心配しつつ、ユカリは森へと足を踏み入れた。

ざわざわと、風が森を揺らす。

襲いかかる手のような影を落とすその葉音に混じって、野生動物

と思しき遠吠えが聞こえる。

彼女の現代人としての感覚が恐怖を訴えてきたが、ヘラのあの瞳の恐ろしさを思い出してなんとかこらえた。

薄暗い森の中を歩いていると、家族でキャンプに行った夜を思い出す。

あの頃のユカリはまだ小学生で、真っ暗闇の中をトイレに行くのが怖くてたまらず、母親を起こしてすがりついたものだ。

翌朝姉にからかわれたが、その日の夜に姉自身も母と一緒にトイレに行ったことを、ユカリはちゃんと知っていた。

あの頃よりも、ずっと野生にあふれて恐ろしい森。

足がすくみそうになるけれど、神殿で神に助けてもらおうという目的を胸に、ユカリは進み続ける。

アキレウスに見つかるのを避けるために、明かりは何も持っていない。けれど、月を司るアルテミスが、夜道を綺麗に照らしてくれていた。

ここに来て、初めて月の明るさを知った時は驚いたものだ。

直接会えずとも、女神達の慈愛は、折に触れてユカリに届いている。

どれぐらい歩いただろう。

ただでさえなまっていたユカリの身体は疲れ切っていて、足も棒のようだ。

動かない足を引きずるようにして薄暗い森の中を歩いていると、急に視界が開けて松明の明かりが見えた。

ああ、神殿だ。



知らず安堵の息がもれた。

いくつもの松明に照らされた大理石の神殿は、赤い炎を反射して朝焼けのように輝いていた。

荘厳な雰囲気にもまれながら一礼して中に入ると、ちょうど夜勤だったらしい巫女が彼女の姿を認め、小さく顔をしかめる。

「何ですか、こんな夜更けに。急患ですか？ それとも、森で怪我でもしましたか？」

嫌そうに響いたその言葉に、ユカリは小さく首を傾げた。

急患？ 怪我？

怪我なら確かにしている。

だが、そこから何故急患という言葉が出てくるのかがわからない。そもそも、ここが誰の神殿かもわかっていないのだから、それを教えてもらわなければ話が始まらなかった。

## 14 実行不可能な試練

『あの……ここ、どなたの神殿でしょうか？』

おそろおそろの彼女が羊皮紙を差し出した時の、巫女の表情といつたら。

「恐れ多くも、アポロンのご子息、医療の神アスクレピオスの神殿です。ご用がないならば、早くお引き取りください」

「ご子息。ということとは、男神。

……駄目だ、完全にアウト。私の苦勞が全て水の泡。

今までの期待が大きかった分、絶望感がユカリの全身を襲う。へなへたと座り込みそうな彼女を追い立てるようにして、巫女達に神殿から出されてしまった。

どうしよう、とユカリは途方に暮れる。

ここ以外に街の外にある神殿を知らない。街中など、怖くて歩けない。

それよりもアポロン様、子供いたんだ。ということとは、奥さんがいたのか。

奥さんがいるのに、女好きなんて……やっぱり最低だ、あの方。

思考回路が変に脱線して、最終的に「アポロン最低」で落ち着いた。

うん、全てはアポロンが悪い。

責任転嫁をしているとは彼女自身わかっただけでも、この絶望をどうしたらいいのかわからなかった。先程まで朝焼けに思えていた神殿の紅い色が、地獄の釜の色に見える。

敷地から一步出た場所、そこにへたりこんでいたユカリの頭上に、不意に大きな影が落ちた。

「ん？ どうした、怪我でもしたのか？」

野太い声。がっしりとした影の形。

男だとわかってても、もはや動く気力が湧いてこなかった。

そんなユカリをしげしげと眺め、ふむ、と男はうなずいた。

「足に怪我はしているようだが……大したものではないな。お前、家はどこだ？ 名前は？」

送って行ってやると言われて、ユカリは必死にかぶりを振る。

気力がないこの状態で、これ以上男と共にいたくはなかった。

それにユカリには、アキレウスに悟られずに帰るといふ重大な任務が残っているのだ。

けれど男はただ笑うばかりで、彼女の必死の訴えを汲み取ってくれなかった。

仕方なく棒きれを拾い、暗い地面に目をこらしながら文字を綴る。

『大丈夫です。お気持ちだけいただきます。ありがとございませす』

「ん？ お前、口がきけないのか」

『はい』

「ふむ……それで、ここに来たというわけか。名は何という？」

どうやら、喉の病気を治そうとして来たと勘違いされたようだ。

それはそれで都合がいいから、ユカリはあえて訂正しようとは思わなかった。

今にも触れられそうなのを必死に身をよじってかわしつつ、手早く名前を書く。

『ユカリ』

「ユカリか。いい名前……ユカリ？ 待てよ、ヘラの呪いを受けたという娘の名も、確かそんな名前だったような」

首をひねった男の人に、ぞわりとユカリの肌が泡立った。

顔から血の気が引いていくのが彼女自身にもわかる。

どうしよう、ヘラに居場所を知らされたら　　！！

様々な最悪の状況がめまぐるしく脳内を駆け回る。

しかし、そんなユカリの焦りをよそに、男はにやりと笑った。

嫌らしく、意地悪く。

「その呪い、『愛している男とのキス』をしないと解けないぞ？

随分と有名な話だから、間違いはないだろう」

面白半分には、けれどとはつきりと断言する男。それがユカリの頭に届くまで、数秒かかった。

強ばっていた身体から、一気に力が抜けていく。

無理無理無理、絶対無理。

何その無理ゲー。

どんな嫌がらせですか、ヘラ様。ああ、渾身の嫌がらせですね。

第一、ユカリに好きな異性などできるわけがないのだ。

それをわかっついていてあえて設定するあたりに、ヘラの怒りの深さが垣間見えた。

アテナの元へ辿り着く道が途絶え、ユカリは泣きたくなるのをこらえながらうつむいた。

にじむ視界がうとましい。

うつむいて必死に瞬きをしていると、いきなり太い腕に抱き上げられた。

反射的に顔を上げたユカリの視界いっぱいには、にやついた顔が迫っている。

逃げようとした時には、もう遅かった。

がしりと腰をつかまれ、ユカリの細い身体はあっという間に引き寄せられる。

「どれ、ひとつ試してみるか」

「……」



雷のように鋭い声突き刺さった。男の動きがぴたりと止まる。  
とても聞き覚えのある、声だった。

## 15 自覚：彼の場合

「悪い、もう一回言ってくれ。耳が馬鹿になっちまったみたいだ」

悪友とも呼べる知人の言葉に、アキレウスは思わず耳を疑った。何度か叩いて調子を確認し、それでも異常がないと分かると、今度は目を見開いて相手を見る。

「ユカリに惚れたって……マジかよ、こんな展開予想してねえぞ」「私が誰を愛しく思おうが勝手だろう」

ふふんと鼻を鳴らしたのは、最近よく出入りをしているアポロン。確かに女好きで有名だが、ユカリが標的になる可能性は、アキレウスの想像の中には入っていないかった。

彼の好みは、清楚でたおやかな女性だったから。

「どこがどうしてそうなった」「なに、興味本位で見っていたが……何かと気配りのきく、いい娘ではないか。よくよく見れば見てくれも悪くはないし、あれほど飽きない女は初めてだ」

実に楽しそうに笑いながら、アポロンが窓の外で働くユカリを眺



める。その目には、神独特の傲慢さがあふれていた。

「アキレウス。あれは、私のものだ」

噛みしめるように呟くアポロンは気づいているのだろうか、自分が恋という名の狂気に染まっていることを。じっとユカリを見つめるその目に、欲望がうずまいているのを。

ざわりと、アキレウスの心が波立った。

極端に男を嫌うユカリに、今のアポロンは害にこそなれ、味方にはなりえない。

恋に狂ったこの男は、周囲の状況など考えもしないのだから。

「……ユカリに迷惑だけはかけるな」

「私がいつ、誰に迷惑をかけた？」

お前が色恋沙汰に陥る度に、相手と俺達を含む周囲全体だよ。

思わずこめかみに青筋が浮き出そうになったが、そこをぐぐつとこらえる。

天上天下唯我独尊を絵に描いたようなこの男に何を言おうと通じないのは、これまでの永い付き合いで分かっていた。

これから、ユカリの身边は騒がしくなるだろう。そしてそれは、すなわちヘラへ居場所を教えることと同意。

不幸にするために墮とした人間が幸せになろうとすれば それ

も、神と婚姻を結ぼうとすれば、当然気性の激しいヘラは烈火の如く怒るだろう。

今度は間違いなく、命を狙われる。

そんな彼女を見捨てるには、情が移りすぎていた。

これから厄介なことになるとため息をつきつつ、アキレウスは微かな胸の焦燥を持てあます。

その正体がわからず、かといってアポロンへの警戒とユカリへの気配りを怠ることもできず。

ユカリに気づかれないようにアポロンを追い返すこと数十回、その夜は訪れた。

「……あの馬鹿が」

ユカリがいなくなった。いや、抜け出した。

本人はうまく誤魔化せたと思っているようだが、アポロンの一件から気を張り詰めているアキレウスには筒抜けだ。

舌打ちをしながら、それでもユカリが何をしようとしているのかを見極めるため、気配を殺して後をつける。

寝間着一枚の薄着のまま、ユカリはふらふらと進んでいく。

右手にサンダルを持っているのは、足音を立てないようにだろうか。

気づかれないよう彼女なりに考えているのだと、思わず苦笑がもれた。

あんなに怯えて、腰も引けていて。  
それでもなお、ユカリは何かを求めているのだ。

「……ま、予想はつくけどな」

街の方へと視線を向ける姿を、何度も見ていた。

その瞳は張り詰めて今にもぷつりと切れてしまいそうな危うさは  
はらんでいて、口元は耐えるように引き結ばれていて。

女神関連のことを考えているだろうと、簡単に予想がついた。

そして、小規模の森を越えたところにある、一つの神殿。

もちろん彼は、それがアスクレピオスのものだを知っていた。

この世界では、万が一に備え、街の近くや要所所にアスクレピ  
オスの神殿があるのが常識だったから。

けれどユカリは、それを知らない。

問われなかったから、アキレウスもあえて教えることはしなかつ  
た。

ただ、神殿を介して神と英雄とが連絡を取り合うことだけ教えて  
あった。

これらから導き出せる答えは一つ。ユカリは、あの神殿に助けを  
求めに行くつもりだ。

視界の先で、白い夜着がひらりとためく。薄暗い森の中で、白  
いそれはよく月の光を反射した。

獣の鳴き声に身体を強ばらせ、服の裾を固く握りしめ。

不安げに何度も辺りを見回しながら、それでもユカリは進んでいく。  
あれほど闇を怖がって、灯りを絶やさないと彼女が、松明も持たずに。

「馬鹿野郎」

家から出るなど言ったのは、彼自身だ。けれど、「一人で」出るなど言っただけ。

頼んでくれば、いくらでも連れて行ってやったのに。

強がっているけれど、本当はそこらの娘と変わらないほど気弱な少女。

本人は用心深く隠しているつもりだろうが、アキレウスはちゃんと見抜いていた。

ヘラにまつわる一連の話も耳に入ってはいたが、実際に本人を目の当たりにして、幾月か共に過ごせば、それが全くの言いがかりだろうことは容易に知れる。

もつと頼れと言いたくなかった。

彼女が自分には気を許してくれていると、うぬぼれていたのかもしない。

闇に同化するために羽織った黒暗色の上衣が、アキレウスの苛立ちを代弁するように震える。

ばさりとそれを振り払い、彼は神殿に入っていくユカリをじっと見つめた。

希望が打ち碎かれるだろうと知りながら、それでも最後まで彼女

の意思を尊重して。

気分は子の巣立ちを見守る親鳥のそれだったが、すぐにそんな悠長なことも言っていられない状況が訪れた。

ユカリが呆然としながら出てくるのは織り込み済みだ。だが、そこにヘラクレスが現れるとは予想していなかった。立ち直った頃を見計らって出て行こうとしただけに、アキレウスの焦りは必要以上に大きくなる。

酒に酔っているのか、いつもよりも絡み方のたちが悪い。友人の様子を見て即座にそう判断したアキレウスが、いい加減にしろと足を踏み出した時。

ユカリが、ヘラクレスに口づけをされそうになった。

「あいつ　！」

頭が沸騰したかと思った。怒りにくらんで何も考えられなくなって、気がついたら大声を出していた。

「ヘラクレス！！　そいつから離れる！！」

ヘラクレスがこちらに向き直る。ユカリの視線も、こちらに向かう。

その目の淵に涙がたまっているのを見て、また怒りがわいてきた。

夜露にしっとり濡れたユカリの服は、その柔らかな曲線をくつきりと映し出してしまっている。

かたかたと小さく震えるその身体に、改めて儂さを思い知らされた。

ユカリは、俺が守る。

それがどこからきたのかはわからなかったが、確かにアキレウスが自覚した、ユカリへの初めての思いだった。

## 16 芽生え：彼女の場合

「アキレウス。この娘と関係が？」

「一緒に暮らしている。いいからとつとと離れる！」

アキレウスの細い腕が、強引にユカリと男　ヘラクレスを引き離す。彼女を背中にかばう形で、アキレウスはヘラクレスと向き合った。

「こいつのことは、他言無用だ。いいな？」

いつもユカリが聞いている声とは全く違う、低くドスのきいた声。縮るようにアキレウスの服をつかんでしまっていたユカリは、別の意味でびくりと震えた。

睨みつけながら獣のようになつたアキレウスに、ヘラクレスはきよとんとした後、盛大に笑い出す。

「なるほど！　最近付き合いが悪いと思っていたら　そういついとか！　任せる任せる、誰にも言わんさ」

豪快にばしばしとアキレウスの背中を叩き、ヘラクレスは何を思ったのかにやついた表情で彼に耳打ちをする。それに対して馬鹿野郎と怒鳴ったアキレウスは、ヘラクレスの背中を蹴飛ばし返して追

いやった。

やけに上機嫌のヘラクレスが見えなくなってから、アキレウスがくるりとユカリに向き直る。  
そして。

「この馬鹿!!」

大声で怒鳴った。

「勝手に外に出るなっただろうが！ こんな夜中にそんな薄着で、襲ってくれっつってるようなもんだろう！」

ばさりと彼が着ていた上着をかけられ、ユカリもようやく自分が寝間着のままだったことに気づく。冷え切った身体に、柔らかい上着の暖かさが気持ちいい。

しかしそれよりも、ユカリにはアキレウスがここにいることが不思議でならなかった。

赤い耳のアキレウスは、顔を背けたままじっと立ち尽くしている。その彼の服の裾を引っ張り、地面に文字を綴ってみせた。

『どっしてここにっ？』



ばれてはいなかったはずだ。

途中何度も後ろを振り返って確かめたし、足音だってしなかった。

疑問をそのまま書いて見せたユカリに、アキレウスは盛大なため息をついた。

「お前なあ……。俺を見くびんなよ？ 家を出た瞬間に気づいたつての。何をしに行ったかは、大体想像がついたから、後をつけるだけにしといたら……」

ちらりと意味ありげな視線をよこされて、ユカリは先程の醜態を思い出す。

間近に迫った息づかいが、今でも耳に残っていた。

ぞくりと背筋を嫌な寒気が走り、思わず自分で自分を抱きしめる。

今更ながらに自分がどんなに危険な状態だったのかを思い知って、ユカリの中の何かが音を立てて切れた。地面にぼたぼたと黒いしみが落ちる。

「泣くなって」

無理。

「あー……。お前、泣いても何もしてやれねえからめんどくせえ」

うるさい。

「大体、泣く時ぐらい声出せよ。んな健気なキャラじゃねえだろ」

無茶言うな。

「そのうち好きな奴もできるかもしれないぞ。試しに俺でやってみるか？」

『冗談も休み休み言え』

書き殴って、条件反射で右アッパー。

もちろん、素人のユカリの拳は軽々とかわされたが、アキレウスがなぐさめてくれているのは何となくわかった。彼女とて、伊達に数ヶ月一緒に暮らしているわけじゃない。

『アキレウス』

「ん？」

書こうか、書くまいか。暫くためらってから書き殴った羊皮紙を見せて、注意を引いて。

『ありがとう』

恥ずかしさで、お礼の言葉は無意識に小さくなった。アキレウスもそれがわかったらしく、にやりと笑う。悔しさがこみあげるが、それよりも普段通りに接してくれる彼の態度が嬉しかった。

アキレウスなら好きになれるかもしれないと、彼女は心の奥でそっと思った。

## 17 エゴと醜さと

それからはユカリも懲りて、家の周囲以外は出回らないようにしていた。

何故かアポロンの姿が見える度にアキレウスが追い出しにかかってはいたが、ユカリは喧嘩でもしたのだからという認識しかしていない。

そんなアキレウスの努力もむなしく、平穏な生活は長く続かなかった。

アテナの時といい、アキレウスとの生活といい、ヘラはどこまでユカリが嫌いなのだろうか。

その会話が聞こえたのは、本当にたまたまだった。

「……だ。早く……」

「マジかよ。でも……だろ？」

「い……、ない。時間かせ……」

珍しく、アキレウスが真剣な声で誰かと話し合っている。

基本的に客の相手をするのはアキレウスだったから（英雄は男ばかりだ）（そんな人々の相手をユカリに任せるほど、アキレウスは鬼畜ではない）、その日も誰か仲のいい英雄が来ているのだと思っていたのだが……何やら様子がおかしい。

家の中なのに声をひそめる理由が、どこにあるのだろうか。

訝りながらそっと中を覗きこんだユカリは、思わず出ないはずの

悲鳴を上げそうになった。

手足が変な方向にねじ曲がり、顔の半分がつぶれている男。骨が折れているわけではなさそうで、歩きづらそうに足を動かしては、身振りを交えて話している。

この世界に来てから、ユカリと関わったのは美しい存在ばかりだった。時折やってくる英雄達も美男ばかりで、だからそういう人しかいないのだろうと無意識に思っていた。けれど、こんな存在も確かにもいるのだ。

怖い。

吐き気をもよおし、口元を押さえながら、ユカリは目を背ける。

男というくりではなく、本能的に怖かった。

顔は目を背けたくなるほどの惨状だし、変な方向に曲がった手足もあまりに不自然だ。

ユカリのいた世界にも、きっとこのような状態の人はいるのだろう。その人のサポートを生き甲斐にしている人がいるのも、知識として知っていた。人間は見た目ではないということもわかっていて、けれど、そんな言葉で全部許容できるほど、ユカリは綺麗な人間ではなかった。

通っていた高校の教育の一環で、ユカリも一度だけ、障害者の人達がいる施設で介助の手伝いをしたことがあった。授業だからと仕方なく行ったが、本当は触ることすら嫌だった。失礼だ、最低だと

わかっていても、どうしても「汚い」という概念が頭から離れなかった。

家に帰ってから、念入りに手を洗った。何度も何度も、手がふやけるまで。

そんな自分が情けなくて、でもどうすることもできなくて。「誰かの役に立つって素敵だね！ かえって元気もらっちゃった」とあの日のことを話す友人に、曖昧な笑顔を返すことしかできなかった。

視線をそらしながらじりじりと後ずさりをしていたユカリが、壁に立てかけておいた箒につまづいた。がたと大きな音をたてながら、箒ごと床に転がってしまふ。

「大丈夫か？」

差し出される手。心の底から心配してくれているとわかる声。けれど、彼女は。

「っ！！」

声なき悲鳴を上げて、カ一杯その手を弾き飛ばしてしまった。

アキレウス以外の男だったからという理由ではない。それよりもっと最低なもの。

心配してくれた、その人の異様さが怖くて。

気持ち悪くて。

無意識に後ずさるユカリに、男は困ったような、悲しそうな笑顔を浮かべて手を引いた。そんな彼に、アキレウスが声をかける。

「ヘファイストス、悪いな。そいつ、男性恐怖症なんだよ」

「男性恐怖症？」

「あー……男嫌い。俺でも不用意に触るとはたき落とされる。だから、あんまり気にしないでやってくれ」

「……そうか。悪かった、ユカリ」

元から引きつった顔で、笑顔らしいものを浮かべる男　ヘファイストスに、アキレウスが苦笑を返す。そんな二人を見ていたユカリは、無性に泣きたくなった。

違う、違うの。

アキレウス、私そんな理由で払いのけたんじゃないの。

激しくかぶりを振っているうちに、とうとう涙があふれてきた。汚い自分が嫌いで。情けなくて。

私、今、声が出ないことを理由に、アキレウスの誤解に甘えてる。

ヘファイストスの優しさでそれがくつきりと浮かび上がり、ユカリは自分の汚さを思い知らされた。その場から逃げ出したくなるほどの恥ずかしさがわき出てくる。

「ユカリ？ そんなに怖かったか？」

涙を拭おうとしてくれたアキレウスの手を、ユカリはうつむきながら乱暴に払いのける。

そんなことをしてもらおう資格など、今の彼女にはなかった。



## 18 請い願う手紙

癩癢を起こしたように見えたのだろうか。

ただただ泣き続けるユカリを、男性陣はどうすることもできずに困っているようだった。

やっとの思いで泣きやんだ彼女が顔を上げると、あからさまにほつとした顔になった。

震える手で手元にあつた羊皮紙を引き寄せ、ユカリは自分にできる限りの丁寧な文字を綴る。

『初めまして、ユカリです。さつきはすみませんでした。よろしく  
願います』

まるで小学生の作文。けれど、今の彼女にはこれが精一杯。

アキレウスの後ろからそっと手を伸ばして差し出すと、受け取ったヘアリストスの顔がほころんだ…… ように見えた。目元が柔らかくなったから、多分そうなのだろう。

「私はヘアリストス。貴女のごことは、アフロディーテからよく聞いていた」

アフロディーテ。

アフロディーテ、美の女神。

あの美しい女神とこの男は、どんな関係なのだろうか。

首を傾げたユカリに、アキレウスがあっさりとその答えを教えた。

「ああ、こいつ、アフロディーテの旦那。んでもって、ヘラの息子」

己の耳を疑った。

ヘファイストスが、アフロディーテの夫。

控えめに言っても美しくないこの男神（神だとさえ思えなかったのだが）が、彼女と結婚しているとは。

アフロディーテが既婚だということは知っていた。旦那がいることも聞いていた。幸せそうに顔をほころばせる女神は、本当に美しかった。

だがどうして、この男神なのだろうか。彼女ならば、どんな美神も選びたい放題だろうに。

混乱しているユカリに首を傾げつつ、ヘファイストスは思いもよらないことを口にした。

「妻経由なら、多少の伝言はできる。アテナに何か伝えるか？」

アテナ様に？

ユカリの脳裏に、あの優しい笑顔が弾けて消えた。

『大好きです。寂しいです。お会いしたいです。でも、頑張つて早くお会いできるようにします。大好きです。見捨てないでください。絶対お会いできるようにします。待つててください。アテナ様、アテナ様、アテナ様、頑張りますから』

ただがむしやらに書き続ける。

自分でも支離滅裂なことはわかっていたが、今まで抑えてきた思いは、一度弾けたら止まらなかった。

必死にペンを動かすユカリを、二人が痛ましいものを見る目で見下ろす。見ていられなくなったのか、とうとうアキレウスがその手を止めさせた。

「もうやめとけ」

ついさっきさんざん泣いたはずなのに、羊皮紙にはたばたと雫が落ちる。頭に乗ったアキレウスの手を、何故か振り払えなかった。

どうして声が出ないのだろうか。

泣きわめきたいのに。

アテナの名前を声の限りに叫びたいのに。

ペンをそつと抜き取られて、羊皮紙を取り上げられて。アキレウスから受け取ったそれを、ヘファイストスがにじまないように丁寧に持っている。

「ユカリ。私はこの属性上、ほぼ全ての女神と接触ができる。母上へラも、私が本気でかかれればそれなりには渡り合える。女神は皆、へラから貴女への接触を禁じられている。何かあったら、私を呼んでくれ。今度の母上の仕打ちは、あまりにも目に余る」

息子として、せめて少しでも罪滅ぼしをさせてくれと。へファイストスが不器用にぎこちなく頭を下げた。

どうやら、息子は母に似ず、謙虚で誠実なようだ。アフロディーテも、彼のそういう部分を愛したのだろうか。

「だからユカリ、早くここから逃げる。母上がこの家を打ち砕こうとしている」

何故そこで「だから」につながるのだろうか。内心で訝ったユカリに、アキレウスが補足した。

「こいつはへラが俺達を狙ってるって聞きつけて、ここまで駆けつけてくれたんだよ。お前のことは、アフロディーテから色々聞いてたんだと」

嘘だ、ととっさに思った。

へラが憎んでいるのはユカリであって、アキレウスではない。彼が家主である家まで攻撃する必要が、どこにあるだろうか。

「冗談でしょう？ と期待をこめて見上げたアキレウスの表情は、けれどとても真剣で固かった。

ユカリは忘れていたのだ。

アテナ達でさえ、憎しみを向ける対象には手段など選ばずに攻撃をする。

「しくじった。アポロンの野郎が派手に騒いだせいで、俺がお前を匿ってることがヘラにばれた。案内しなきゃいいだろうと思ってたが、どうやらあちらさんはお前を安住させるつもりもないらしい」

その言葉は、とても正確に彼女を貫いた。あの夜に怒られてから、それ以上の迷惑はかけまいと心掛けていたつもりだった。

けれど実際は、ただ居候しているだけで多大な迷惑をかけていたのだ。

その事実が、ユカリを打ちのめす。

「母上から、新たな武器の製造を依頼された。だましましたし納期を延ばしてはいるが、もう限界だ。ここにはお前達はその身を討たれて死んでしまう」

無情なヘファイストスの言葉が更に追い打ちをかけたが、ユカリには関係なかった。

彼女はこれ以上ないほど打ちのめされていたから。

彼は有名な鍛冶の神らしい。

材料の調達と偽って、幾多もの監視の目をかいくぐって、ようやくここに来てくれたのだという。

そして、武器の納期の引き延ばしは、あと二日が限界。

迷っている暇はなかった。

機械的に動いてヘファイストスを見送り、ユカリはのろのろとアキレウスを見上げる。何と言って詫びていいのかわからなかった。そんな彼女に、アキレウスは優しく苦笑する。

「気にすんな、住む家に執着するたちじゃない。必要なもんまとめとけ」

それはつまり、彼もついてくるということだ。

ユカリの無言の問いに気づいたアキレウスは、今度こそ呆れたような表情になった。

「お前、俺が人を追い出して安全を確保して満足、なんて人間だと思ってたのか？」

彼の優しさが、今は痛くてたまらなかった。

## 19 逃亡

\*\*\*\*\*

彼は覚えていた。

あの感触、あの味。

思い出したくはなかった。

だがしかし、彼は飢えていた。力が必要だった。

今一度禁忌を犯そうとするほどに。

獲物はすぐ側にいる。焦ることはない。

全ての舞台は整った。

後はそう 待てばいいのだ。ただ。

\*\*\*\*\*

走る、走る、走る。

見えない追っ手に怯えて、ひたすら走る。

荷物はほとんど、アキレウスが持っている。家財道具も何も持たず、本当に生きていくのに最低限のものだけだ。

服もずっと簡素なものにして、もう数日風呂に入っていない。履き慣れたサンダルはぼろぼろにすり切れて、随分と薄汚れてしまった。

眠る時は大抵野宿。獣が寄りつかないように気をつけながら、固い地面の上で横になるのにも慣れてしまった。おかげで髪も砂だらけ、触れた指にじりじりと嫌な感触を返してくる。

人間界に逃げる。

あの後、アキレウスはユカリにそう言った。天界にいるよりは、ヘラの目を誤魔化しやすいだろうと。

どこをどう走っているのかすらわからない。ここが天界なのか、人間界なのか、それとも、全く違うどこかなのか。

どこまで気づかれているのだろうか。

ヘラは、ユカリの現在位置まで把握できるのだろうか。

アキレウスが一緒だということも、知られているのだろうか。

面倒事を嫌っていたアキレウス。ヘラに目をつけられたくないからと、アテナのところへの案内を断ったアキレウス。けれど結局、彼の優しさに甘えて、巻きこんでしまった。

対して、自分は何も持っていない。唯一役に立ちそうなものは、ヘファイストスが饞別にとくれた短刀一本のみ。アキレウスに返せるものは、何もない。自分の不甲斐なさに、悔し涙が出てきた。

それをたまたま振り返ったアキレウスが見つけて、心配そうに眉を顰める。



「ユカリ、休むか？」

『だい じよ ぶ』

そこらにあつた棒きれを拾つて地面に書き殴つた文字は、はたして読めただろうか。厳しい表情でうなずいたアキレウスが、また走り始める。荒れた道に、砂埃がたつた。

やっとの思いでそれについていきながら、ユカリはからからの喉に唾を飲み込む。血の味がするような錯覚を覚えていた喉は、唾ごときでは治らなかつた。

それでも、ユカリが文句を言うのは筋違い。アキレウスは彼女に合わせて、かなりペースダウンしてくれているのだから。

『どい 行く？』

ようやくとれた休憩中、水で乾きを潤しながらそう訊くと、言いくさそうにしたアキレウスが微妙な顔をして答えた。

「歓楽街。あそこなら女だらけだし、ヘラの目も少しはごまかせるだろ」

女だらけという単語に、ユカリが小さく反応した。

彼女の予想が外れていなければ、アキレウスはわざわざ男が極力少ない場所を選んでくれたはずだ。

男嫌いのユカリのために、女装をしてくれているアキレウス。その上、居場所まで考えてくれていているアキレウス。

ありがたすぎて、言葉も出ない。

だからというわけではないだろうが、最近ようやく手をつなぐのだけは大丈夫になった。

手をつなぐだけは。

他は無理。いくらアキレウスでも無理。見た目美女でも無理。

自分の様々な涙ぐましい努力と、それに反比例するかのような結果の数々に、ユカリは思わずほろりとなってしまうた。そんな彼女に、アキレウスが真剣な声をかける。

「いいか、ユカリ」

何事かと思つて視線をやると、アキレウスは怖いほどの鋭い眼差しだった。

「歓楽街は、欲望の街だ。当然男も大勢くる。お前、それに耐えられるか？」

そうだった。

軽く考えていたけれど、歓楽街ということとはつまり、そういうことをする場所です。

そんなところで、自分は嫌悪感を隠さずに生活できるだろうか。特に、女性を買いにくる男達に。

想像してみて、背筋がぞくりとした。同時に感じる、男への強い拒否反応。

その感覚が伝わったのだろうか、アキレウスが気遣わしげな表情になる。強ばった表情を無理矢理微笑みに変えてうなずくと、かえって心配された。

「……嫌ならやめるぞ？」

『大丈夫。お姉さん達の陰でこっそりしてる』

「そうか……無理だと思ったら、いつでも言えよ」

『ありがとう』

優しいアキレウス。

自分のことなんてそっちのけで、ユカリを第一に考えてくれるアキレウス。

本当なら、縁もゆかりもない彼女のことなど、放り出すのが一番いいというのに。

けれど、見捨てられたなら、きっと自分は泣くのだろうと、ユカリはぼんやりと思った。

## 20 天の中の人間界

人間界は天界と比べるとどこか薄暗く、大理石の色もくすんで見える。草花で覆われておらず、踏み固められた土の道は整然としていたけれど、ユカリにはただ土埃が邪魔だとしか思えなかった。

アテナからもらった、大切なキトンを売り払って、代わりに麻でできた筒のようなキトンに着替えた。ごわごわした感触と、アテナとの思い出の品が無くなってしまったことに、少しだけ泣いた。

逃げ出す時に持ち出した、唯一のよすがを失うのには、さすがの彼女も抵抗した。それでも、万一神気がまとわりついているといけないからとアキレウスに説得され、唇を噛みしめて衣装屋へ手渡した。

それ以上に全てを捨ててくれたのは、アキレウスの方だったから。

どんなことがあっても我慢しよう、石造りの埃っぽい街並みを見ながら、そう決心したのに。

ユカリを待っていたのは、厳しい現実だった。

夜になるのを待たずに、毎日聞こえる男女の声。終わった後の女達から放たれる、独特の臭い。部屋中に充満した、あの臭い。

男達から貢がれた装飾品を身に纏い、きらびやかに装った女達にさえも、ユカリの拒絶反応が出そうだった。

隠れながら行動していても、時々見つかって、男に捕まりそうになった。声が出ないから、悲鳴を上げることもできない。必死にもがいて逃げ出して、誰もいない部屋の隅っこで泣き続けた。

ここでは誰も、彼女を気にしない。そういう約束でユカリ達は雇われた。

普通の裏方と同じ、単なる女中。

当然、行為の後片づけもしなければならぬ。

気持ち悪い。気持ち悪い。気持ち悪い。気持ち悪い。気持ち悪い。

気持ち悪い。気持ち悪い。気持ち悪い。気持ち悪い。気持ち悪い。

気持ち悪い。気持ち悪い。気持ち悪い。

頭の中がその単語でいっぱいになる。

どうして男はこうなの？ どうして歓楽街なんてものがあるの？  
別に、こんなことをしなくても生きていけるじゃない。奥さんがいる人もいるだろうに。どうして愛している人以外の相手とできるの？

ここで働く女達は、何故この道を選んだのだろうか。好きでもない相手に毎晩何度も抱かれて、どんな気持ちなのだろうか。

一度、訊いてみた。答えは簡単だった。

「気持ちいいもの。それに、あたしにできることも他にないしね。みんな金払いがいいから、結構割のいい仕事よ？」

答えを聞いて、ユカリは一瞬でその女を軽蔑した。あるいは、金に困って売られたのだと聞かされれば、反応は違ったかもしれない。

けれど、自分の快楽を優先するなんて。好きな人がいないからって、数え切れないほどの男に抱かれて何とも思わないなんて。裏方で生きる道だっただろうに。

そう考えるのはユカリが平成の世の中に生きていたからであって、実際には女が働く事など言語道断の世界だったのだ、古代ギリシャという場所は。

彼女達にも様々な背景があつて、事情があつて、それでも負の部分まで丸呑みして受け止めて、彼女達なりに生きているのだ。

それをユカリにわかれというのは、彼女達に平成の日本を理解しろと言うくらい無茶な注文だった。

『そうですね。ありがとうございます』

そつけなく書いて突き返した後に、ちらりと女に悪かったかという思いが心をよぎった。けれど、嫌悪感をこまかすために、ユカリはそつするしかなかったのだ。

裏の仕事は厳しい。

敷布の洗濯。部屋の清め。めまぐるしくやってくる客のための、女達の衣装の整え。その他小物の管理。

とにかく、情事に関することが多いのだ。

小物の管理なんて大したことはないと思うかもしれないが、個人的な貢ぎ物を除けば大切な店の備品。一つでもなくなっていたら、誰がどこで失くしたのかを徹底的に追及される。ユカリはしゃべることができないから、意思の疎通も難しい。自然と追及の手も厳しくなる。

しゃべるよりも書く方が遅い分、その間にもさらに責められるのだ。

その度にアキレウスが助けに入るのだが、汚い言葉で激しく罵られる精神的な苦痛は、回を重ねるごとに酷くなっていった。

男の気配が纏わりつく仕事は辛い。裏方の仕事も、覚悟していたよりもずっと辛い。

逃げ出したい。

歓楽街は、けして彼女に優しい隠れ場所ではなかったのだ。

もちろん、好意的な妓女も何人もいた。自分の花代から少しだけ取り分けて、ユカリに「好きなものを買っておいで」と言ってくれた人もいた。

けれど、それで帳消しにできるほど、彼女の心の傷は浅くなかった。

そんなある日、店の裏の方にある倉庫の整理を頼まれた。普段は古参の者が担当する、特に注意を払わなければならないものがたくさんある場所だ。

何故、自分にその役割が回ってきたのだろうか。そんな疑問を抱きつつ、ユカリは言われた通りにおとなしく倉庫に向かった。

古い備品がたくさんある倉庫。その中の一つ一つを丁寧に拭いて、埃を払っていく。壊れやすいものもあるから、手つきも自然と慎重なものになる。

集中して、集中して、繊細な装飾に傷をつけないように気をつけて。

息を止めるほど集中していたから、気づいた時にはもう遅かった。

「ユカリ」

耳元で聞こえる、記憶にある声。

もう二度と会いたくないと思っていた声。

ぞわりと、全身に寒気が走った。



## 21 望まない再会

「っ！！」

反射的に飛び退こうとして、けれどももう遅かった。

たくましい腕にしっかりと腰をつかまれて、逃げるにも逃げられない。恐怖で、ユカリの全身から血の気が引いていくのがわかった。

背後から襲いかかれて、しっかりと抱きしめられて。これ以上の恐怖があるだろうか。

「ユカリ……会いたかった」

情熱的な吐息が、耳元をかすめる。それだけで背筋にぞわりと寒気が走った。さらに片手が、彼女の背中や脚を這い回る。

とっさに思い浮かんだのは、男女の営み。

あの忌まわしい、おぞましい行為。

目の前が真っ暗になってきた。息がうまくできない。

それでも必死に腕を振り回したが、ユカリのそんな抵抗を、あるアポロンは笑いながら軽々と避けてしまった。

「はははは！ 恥ずかしがり屋だな、ユカリは。そんなに照れなくとも、ここには私達以外誰も来ないぞ？」

違う、そうじゃない！  
どんな勘違いなんだ？

心の中だけでそう罵倒したところで、ユカリは微かな引っかかりを覚えて首を傾げた。

今アポロンは、「誰も来ない」と言った。

ならばこれは、最初から仕組まれていたものなのか。この倉庫、この時間、この役目。全てがそれを裏付けている。

がつん、と頭を殴られたような気がした。

この楼閣で働き始めて数ヶ月、いい思いなど一度もしていない。けれどまさか、ここまで酷い扱いをされるとは思っていなかった。何度も何度も男が駄目なんだと説明して、お願いだから裏の仕事だけさせてくれと頼みこんで。

嫌な顔はされたけど、確かに約束してくれたのに。

「ああ、この芳しい香り……ユカリ、ユカリ、ユカリ」

首筋に顔をうずめられた。息づかいが耳元ではつきりと聞こえて、気が遠くなってくる。

本格的に呼吸ができなくなってきた。

薄れる意識の中で、ユカリは必死に助けを求める。

誰か、誰か助けて。アテナ様、お父さん、お母さん、お姉ちゃん、アフロディーテ様、アキレウス！！

「ユカリ!!! ここか!?!」

突如激しい音と共に扉が開き、彼女の耳に慣れた（けれどこちらは安心できる）声が響いた。

視界に色が戻ってくる。

呼吸ができるようになってくる。

力を振り絞って視線を向けたユカリの目に、無意識に一番強く助けを求めていた相手が映った。

肩で息をしているアキレウス。

服は大きく乱れて、ところどころほつれていた。

誰かにつかまれたのか、くつきりと皺が残っている部分もある。

「アポロン、そいつから離れる!」

「人の恋路を邪魔するか、アキレウス!」

「そいつの状態を見えから言え!!!」

アキレウスの拳が、アポロンの頬にめりこむ。同時に強く肩をつかまれて、一瞬で引き離された。

まだ整わない息を必死で静めているユカリの前で、二人の壮絶な殴り合いが始まった。

調度品や備品が次々と派手に壊れて、その度に大きな音がする。

「いい加減にしろ！ こいつにつきまとうな！」

「何を！？ 嫉妬か、そうかアキレウス！」

「ああもう、お前と話すのめんどくせえ！」

殴り合っている割には、会話の内容がいつも通りなのは、ユカリの気のせいだろうか。

けれど最終的には、アキレウスの蹴りがアポロンの鳩尾に直撃して、アポロンは倉庫の中を派手に巻きこみながら吹っ飛んだ。

口元にはじんだ血をぐいと拳で拭い、肩で息をしたままのアキレウスがユカリの方を見る。

「ユカリ。ここを出るぞ」

短い言葉に、ユカリはうなずくのをためらった。

あまりにも突然の内容に、頭がついていかなかった。

それよりも、何故それほど怒っているのだろうか。

ユカリに対して怒っているのではない、それぐらいは彼女にもわかる。

けれど、他に怒る要素がないと思ったところで、店の対応かと検討がついた。

絶対に男とは接触させない。

それは、この楼閣で働くにあたって、無茶とも言える条件だった。いい顔をしない店の主人に必死に頼みこんで、ようやく約束をしてもらったというのに、たやすくそれを破られた。

「あいつら、金に目がくらみやがって……！ アポロンに逆らえるわけがないって、んなの単なる言い訳だろうが！」

ちくしょう、とアキレウスが悪態をつく。つかまれた腕が痛い。ずんずんと進む彼について（というよりも、歩幅の違うユカリはほとんど引きずられて）歩いていくと、怯えた表情の従業員達が次々に道を空けた。

少ない荷物をささっとまとめ、アキレウスはユカリを追い立てるようにして店を出ようとす。そこに番頭が立ちはだかった。

「アポロン様はとんでもない上客なんだぞ？ それを、指名した娘を出さないようにするなんて……」  
「こいつは男に恐怖心を持つてるんだって、あれほど言っただろうが！ 娘に無理強いをするのがこの店の方法か！ 花街一と謳われた、この楼閣の！」

アキレウスの一喝が、番頭を直撃した。

そのあまりの迫力に、思わず被害者のはずのユカリでさえ、アキレウスの陰に隠れる。

彼の迫力にたじろいだ表情をしていたが、そんな彼女をじろりと睨み、番頭は最後とばかりに噛みついた。

「金はやらんぞ！」

「いらねえよ、んな汚ねえもん。」

ユカリ、行くぞ」

「待て！ 壊した備品の弁償を……！」  
「それこそ、アポロン様」に払わせる！ 元はと言えばあいつが原因だ……！」

どこまでも正論を言い放って、アキレウスはユカリの腕をつかんだまま、埃っぽい道を歩き出す。

夜には賑わう広いそこは、昼間の妙な静けさに包まれていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7303x/>

---

の女神と の娘

2011年11月5日18時47分発行